ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 41 号

内里八丁遺跡の水田跡 …… 竹原　一彦…1
古墳における木柱の樹立について …… 小池　寛…7
研究ノート　阿婆田窯跡群の須恵器－重ね焼き技術の検討を中心に－
…… 森　正…14
－平成３年度発掘調査略報－ …… 20
1．小谷 17 号 墳　3．史跡教王護国寺境内
2．平安宮大極殿院跡
資料紹介　高山12号墳出土の鐔 …… 増田　孝彦…24
埋もれた縄文土器(1)－正垣遺跡・谷内遺跡－ …… 三好　博喜…25
府内遺跡紹介　52．海印寺跡 …… 28
長岡京跡調査だより …… 31
センターの動向 …… 34
受贈図書一覧 …… 36

1991年9月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版　内里八丁遺跡の水田跡

A地区第３遺構面全景（南から）

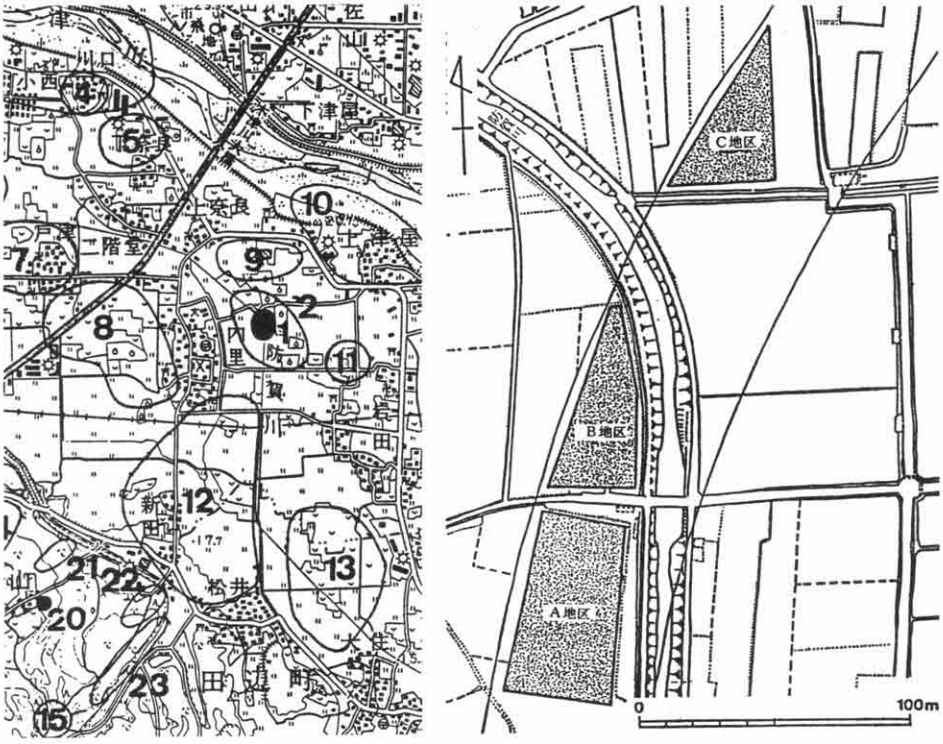
内里八丁遺跡の水田跡

竹　原　一　彦

1．はじめに

内里八丁遺跡は、建設省の計画する第二京阪道路建設に先立ち、近畿地方建設局浪速国道工事事務所の依頼を受けて、平成元年度から当調査研究センターが発掘調査を継続して実施しているところである。

内里八丁遺跡は、京都府八幡市内里町に所在する、弥生～鎌倉時代にかけての集落跡である。遺跡は木津川によって形成された沖積平野部に存在する。これまでの調査（Ａ地区）で、４時期の遺構面の存在を確認している。現在、上層の第１遺構面（奈良～鎌倉時代）・第２遺構面（古墳時代前期）の調査を終了し、弥生時代後期末頃の水田跡を検出した第３遺



第１図　調査地位置図
１．調査地　　２．内里八丁遺跡

構面の全容がほぼ明らかになったことから、この水田跡に関して概要を紹介する。

2．調査概要

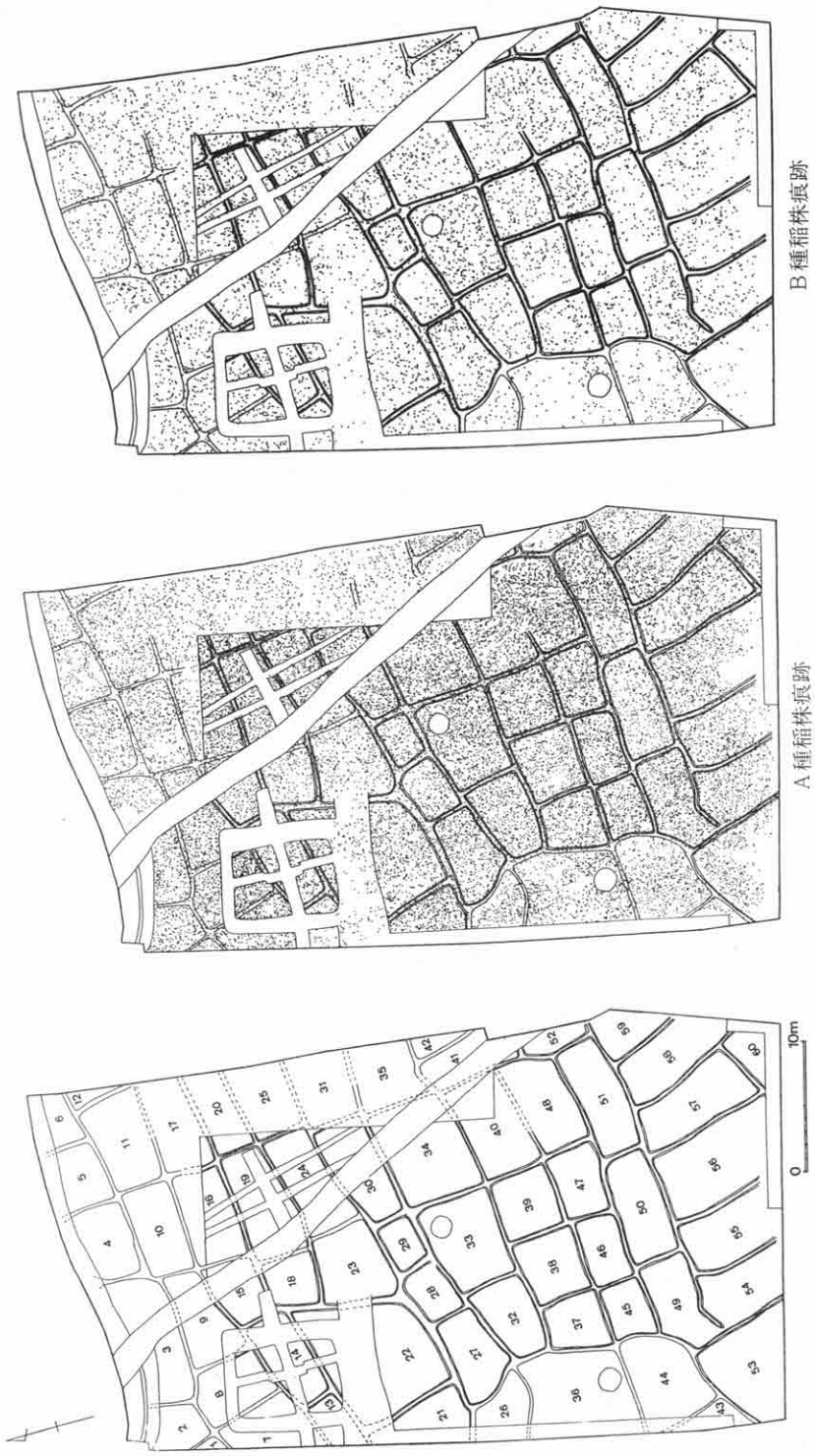
第３遺構面の存在は、第２遺構面で検出した溝（ＳＤ39）等の壁面観察により、新たに判明したものである。第２遺構面下には洪水砂と粘質土層が広範囲に認められ、下層の試掘調査を実施したところ、洪水砂中から弥生時代後期に属する土器の出土をみたことから、協議の上、平成２年11月から下層の面的調査を実施した。当初、重機による洪水砂の除去作業中、砂層中から水田の畦畔を検出したことから水田遺構の存在が明らかとなり、畦畔直上までの洪水砂は重機で除去し、その後人力による掘り下げを行った。以下、調査で判明した事実を簡単に紹介する。

(1)水田遺構

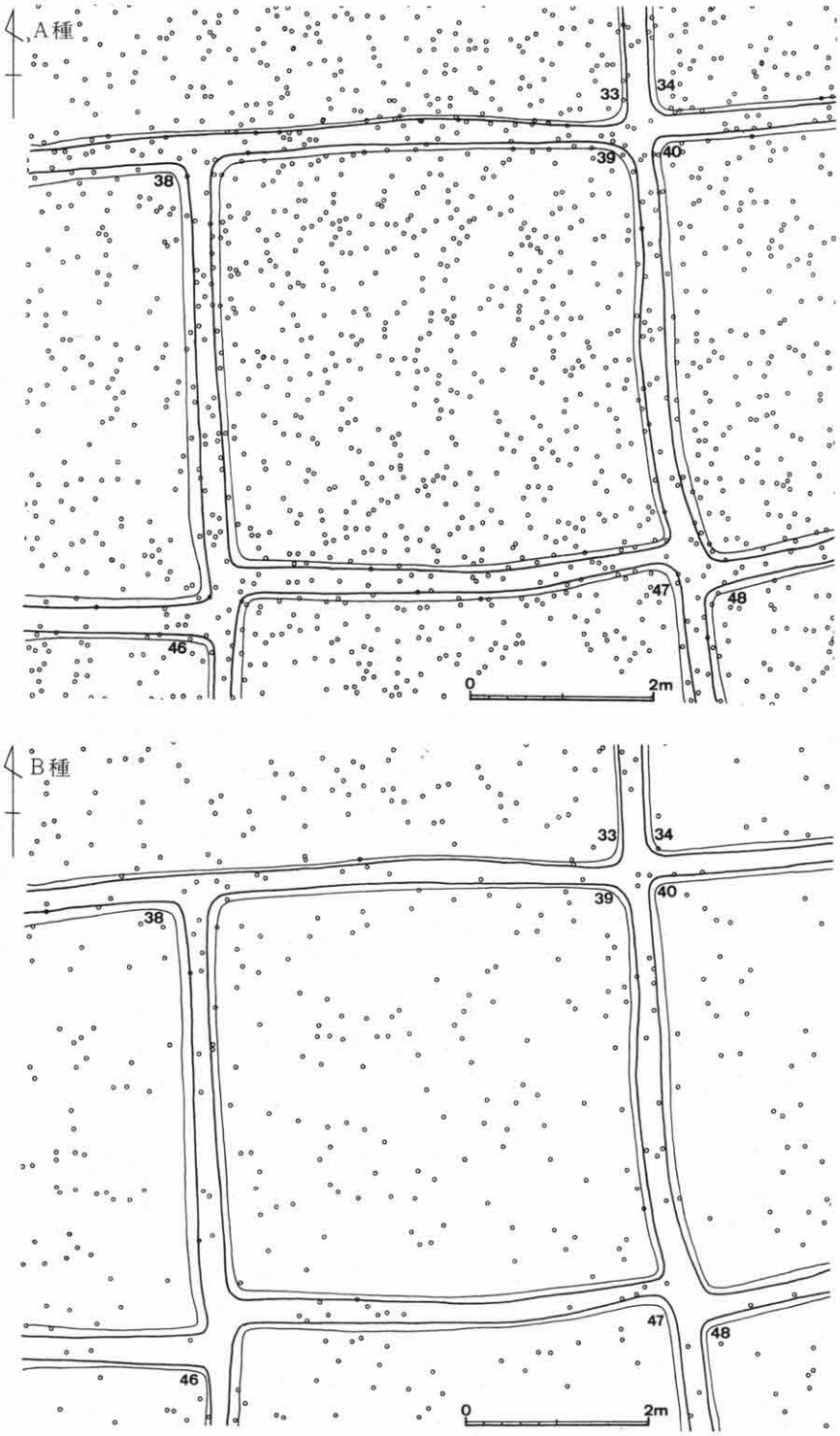
Ａ地区第３遺構面（約1,800㎡）で検出された水田遺構は多くの畦畔からなり、淡黄灰色を呈する厚さ約20～30㎝の洪水砂によって完全に埋没していた。現在のところ、推定分も含め60枚の水田跡を検出している。検出した水田面では、東西の水田（水田6・12・26・36・43・44）が海抜11m付近と高位置にあり、次いで南部の水田53～60は海抜約10.9m、北端の水田１～３では海抜約10.8mを測る。第３遺構面での旧地形は、南から北に微妙に下がる谷状地形であり、地形を巧みに利用して水田が造られている。

検出した畦畔は断面形が半円形を呈する。下端幅は30～40㎝前後であり、水田面からの高さは７㎝前後を測る。谷状地形を横断する東西方向の畦畔は直線的にのび、比較的幅広な傾向がみてとれることから、水利と関連した恒常的な畦畔であったとみれよう。対する南北方向の畦畔は小規模なものが多く、各所で寸断状態にあることから、仕切りの畦畔とみられる。調査地内には水路等の潅漑施設が存在しないことから、各水田の水回りは畦畔上をオーバー・フローさせる、いわゆる「掛け流し灌漑」を行ったものと推定される。

水田の基本形は四辺形であるが、畦畔が緩やかな円弧を描くものもあり、かなり不整な四辺形を呈するものも認められる。四隅の判明している水田跡での最小面積は、水田29の9.1㎡、最大面積は水田33の32.8㎡で、平均約22㎡である。全容の判明しないものでは、より大規模な水田跡が存在するが、最大でも50～60㎡前後の規模とみられる。調査地中央付近の水田では、水田37・38・45・46や水田38・39・46・47等のように、その基本的な組み合わせが「田」形を呈するものも存在する。谷状地形の始まる調査地南部には、整然と並ぶ長方形プランの水田が存在する。水田49～51は東西方向に配置されるが、これより南の水田では南北方向に長い水田が横一線に並んでいる。一方、谷部となる調査地中央から西北部の水田は変則的な並びとなり、規模・形状とも変化に富む特徴を持っている。



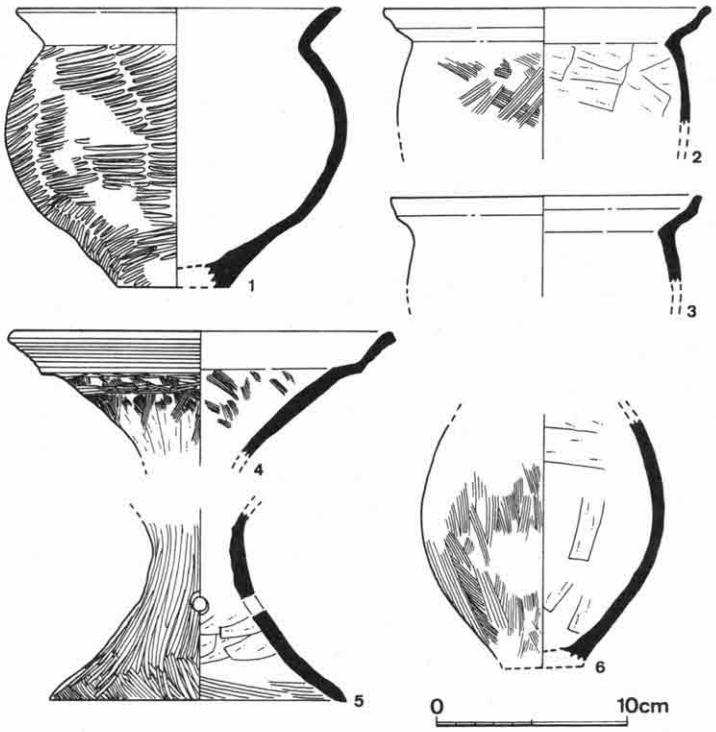
第２図　第３遺構面検出水田跡及び稲株痕跡分布図



第３図　水田39稲株痕跡分布図

(2)稲株痕跡

検出したすべての水田面と畦畔上から、稲株痕跡とみられる無数の小穴を検出した。茶灰色粘質土層の水田面に、洪水砂である黄灰色を呈する砂が、稲株の腐植部分の窪みに落ち込んだ状態で検出された。稲株痕は直径約5～7㎝大の円形もしくは楕円形のプランをもつ。深さは5㎝前後を測るものが多数を占めるが、一部には12㎝に達するものも存在する。垂直な穴は少なく、斜孔するものが大多数を占める。底はやや丸みをもって終わる例が多い。検出した稲株痕の埋土は、洪水砂が充満したA種と、洪水砂を含むが粘質土を主とするB種のおよそ2種類に大別できる。A種とした稲株痕内には洪水砂のほか、3～7㎜大の粘質土を含む例が多い。A・B両種は水田面と畦畔上に個々に存在するが、一部の稲株痕ではA種がB種を切っている事実が判明した。



第4図　出土遺物
1.水田45　2.水田47　3.水田9　4.水田6　5.水田8　6.水田58

(3)出土遺物

水田を覆った洪水砂中と水田土壌内から甕・器台等の弥生土器が出土した。大多数は洪水砂中からの出土である。大半は山陰地方(丹波・丹後)の影響を受けた土器であり、畿内及び近江系土器の出土はわずかであった。

また、水田土壌の水洗により、炭化米が少量出土している。

3．まとめ

今回の調査では、奈良時代と古墳時代の集落跡の下層から弥生時代の水田跡が検出された。この水田跡の特徴をあげると、以下のとおりである。

①水田の立地は木津川等により形成された沖積地(海抜約11m)で、南から北に下がる緩やかな谷状部にあたる。

②水田の基本形は四辺形であるが、地形の制約を受けたいびつな水田もみられる。

③水田の規模は、13㎡前後と26㎡前後が多数を占める。

④水利は、調査地内に灌漑用水路が存在しないことから、「掛け流し灌漑」を行ったとみられる。水口は1か所検出したが、小畦畔を切るものである。

⑤水田面と畦畔上には稲株痕跡とみられる小穴が多数存在する。稲株痕跡には切り合う例がある。水田39における一坪内の稲株痕跡数は、A種(新株)約90点、B種(古株)約20点であった。調査地全域での総数は30,000点を越す。新旧の稲株痕跡の存在から、水田の耕起(しろかき)をせずに稲作を行った可能性もある。

⑥水田面と畦畔上の稲株痕跡は不規則な分布状況を示すが、80cm前後の範囲に等間隔で弧を描く並びが多数認められる。このような事例から、稲の移植(田植え)を行っていた可能性がある。畦畔を横断して2枚の水田に渡る並びも存在する。

⑦出土土器は、山陰地方の影響を強く受けたものが多数を占める。

⑧時期は、弥生時代後期末頃と考えられる。

⑨下層にはさらに古い水田跡が存在する。

全国では、これまでに400か所を越える水田遺構の調査が実施されているが、稲株痕跡の検出例はわずかである。現在のところ滋賀県服部遺跡[注1]・岡山県原尾島遺跡[注2]・大阪府上田町遺跡[注3]で稲株痕跡が検出されている。弥生時代前期の服部遺跡を除く2遺跡と内里八丁遺跡は、稲株痕跡を検出した水田が弥生時代後期水田の点で共通する。今回検出した水田跡と稲株痕跡は、当時の農耕技術を知る上で、他の3遺跡例とともに貴重な資料となろう。

なお、内里八丁遺跡では下層の水田跡を継続調査中であり、下層の水田面でも稲株痕跡を多数検出しているところである。稲株痕跡に関しては検討課題が数多いことから、詳細については後の機会にゆずりたい。

(たけはら・かずひこ＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1　工楽善通氏の御教示による。

注2　「百間川原尾島遺跡」2(『岡山県埋蔵文化財報告』第56冊　岡山県教育委員会)　1984

注3　「上田町遺跡発掘調査」(『現地説明会資料』　松原市教育委員会)　1991

古墳における木柱の樹立について

小池　寛

1．はじめに

木柱あるいは石柱を樹立し、トーテニズムの象徴とする事例は、福井県真脇遺跡や秋田県大湯環状列石に見られるように、縄文時代にその初源を見い出すことができるが、弥生時代には、農耕の到来と関連して、鳥形木製品の樹立によって「穀霊」を招来させ、祭場区画の道具として利用されている。これらの事例は、同じように木柱などを樹立させるものの、狩猟採集を生業とする社会的背景と農耕を生業とするそれでは、基本的に大きな相違があり、同じ概念で理解するには多くの問題を含んでいる。一方、古墳時代に入ると、前方後円墳などの墳墓に埴輪とともに樹立される木製品が知られている。一般に「木製樹物・木製の埴輪」と称されるが、その用途については、近年の資料の増加によって徐々に一定の解釈がなされつつある。

著者は、陸橋部の成立と木柱樹立、そして、鶏形土器・鳥形土製品の配置の問題点について、拙考[注1]を提出したことがあるが、その起源については、十分に考察できなかった経過がある。そのため、本文では、関連する論考を整理しながら、木柱樹立の起源について私見を提示したいと思う。なお、本文を提示する契機は、拙考提出以後、土生田純之・高橋美久二両氏の詳細な論考が提示されたことと、両氏からの有益な御教示を得たことにある。記して感謝の意を表し、本文のはじまりとしたい。

2．木柱樹立の起源に関する諸説概観

縄文・弥生・古墳時代を通して木柱を樹立する行為は、比較的広い範囲で確認されているが、各々の概念には大きな相違がある。この認識に留意し、以下、私見を提示する上で重要な諸説について概観しておきたい。

樹木崇拝に関する研究は、主に、民族学的見地から進展した。James G. Frazer[注2]は、その著書『金枝篇』において樹木崇拝に関する類例を詳細に検討した。その中で、中央オーストラリアのデリ族は、「彼らの祖先が変態したものと考えられているある樹を非常に神聖」視し、その樹木を伐採したり焼いたりしないことが報じられている。また、フィリピンのある種族は、祖先の霊がある樹に宿ると信じ、その聖樹を伐採しない。一方、朝鮮半島で

は、疫病などで死亡した人の霊は、「必ず樹木に宿る」という概念があり、樹木の下の石塊に酒などを供える。中国では、「測り知れない太古から、死者の霊を強めて遺骸を腐食させないために、墓の上に樹を植える習慣」があり、生命力の強い松が好んで植えられたらしく、「時として墓の上に繁った樹は、死者の霊と同一視」されることがあったと報じた。その他、数多くの類例によって、樹木崇拝が世界的に広がっていることを検証し、その後の研究の基礎になっている。

曽布川寛(注3)は、その著書『崑崙山への昇仙』において、湖南長沙に所在する馬王堆１号墓（前漢初期）の一槨四棺の第２・３・４棺に描かれた漆画を概観し、特に、帛画について図像学的方法で詳細な検討を加えた。その中で崑崙山が、樊桐・玄圃・層城の三層からなり、それへの昇仙するようすを概観した。また、淮南王劉安が編集させた「淮南子」地形訓の記事などとあわせて、崑崙山自体が聖域的性格をもっていたことを指摘した。そして、その頂上部付近には左右に沙棠の木が描かれていることに注目し、これが崑崙山自体のもつ「聖性」の象徴であることを推測した。

近江昌司(注4)は、河南省出土の前漢代に比定できる大形空心磚に描かれた「聖樹」について検討を加えた。その中で、双獣に挟み込まれた樹木の頂上に垂平に果実を表現することによって、絶対神、あるいは「死者が昇天していく先の世界で、神にまみえる場所」を象徴したと推論した。また、朝鮮半島や日本から出土する冠の文様の起源が、この聖樹にあることを論じ、古墳時代における文物交流について考察を行った。

特定の樹種に「聖性」を認定し、それが象徴となり、また、崇拝の対象となることが、洋の東西を問わず存在することを証明したJames G. Frazerの研究や、崑崙山が聖域であり、その形状を解釈した曽布川寛の研究は、間接的ではあるが、古墳時代の木柱樹立の起源を考える上で重要である。

一方、古墳時代の木柱樹立に関しては、土生田純之・高橋美久二の研究をあげることができる。

土生田純之(注5)は、福岡市西区今宿に所在する鋤先古墳の墓道中央のピットに注目し、墳丘上にピットが存在する類例を集成した。そして、木柱の意義を考える前提条件として、古墳の被葬者は神ではなく単なる司祭者にすぎないことを認識し、「木柱は亡き祖霊の依代」であったと推測した。また、その起源論についても中国の陵寝制に由来する聖廟、享堂建築の影響とするには、中国での類例が極端に少ないことなどを指摘し、後述するような朝鮮半島からの影響を指摘した。

高橋美久二(注6)は、「木製の埴輪」についての研究史を詳細にまとめ、古墳に伴う木柱の類例を集成し、笠形木製品が大型で布を張った衣笠を忠実に模倣したと推論した。一方、木柱

樹立の起源については、前方後円墳の成立と埴輪樹立の研究史を整理し、河南省安陽殷墟５号墓上の「母辛宗」建築や河北省平山県に所在する中山王陵の享堂などに、前方後円墳の段築が成立する背景があったことを推論した。また、前方後円墳の各段の木柱樹立には、このような享堂建築の思想が影響したと考え、「墳頂部に木製でつくられていた建物も、土製の家形埴輪に置きかえられ・・・次の段階では、実物で飾られていた威儀具や儀杖具なども土製や木製の形代に」変化していったことを想定した。

先述したJames G. Frazerの民族学的研究でも知れるように、樹木や柱が、崇拝の対象や聖域区画の象徴であることは、広く認められており、木柱樹立の起源を東アジア以外の地域に見い出すことも必要であるかも知れない。しかし、古墳に樹立される木柱は、原始宗教で頻繁に見られるトーテニズムとは異なり、一種の確立された儀礼に伴う祭具としての側面をもっており、また、それが前方後円墳に代表される首長の墳墓に存在することから、単に、木柱樹立の起源だけを重要視することは危険であり、定型化した大型の前方後円墳の成立をも含めた起源論を総合的に考えなければならない。その意味において、木柱樹立の起源は、中国か朝鮮半島に存在する可能性が指摘できよう。次章では、その点に留意し、若干の類例を提示し、木柱樹立の概念を分類しておきたい。

３．木柱樹立の概念の分類について

土生田純之・高橋美久二論考には、現在までに確認された木柱樹立の類例が集成されているため、集成作業は両論考に委ね、樹立の概念を考える上で重要な根拠となり得る類例について概観しておきたい。

京都府加悦町鳴谷東１号墳[注7]や同長岡京市今里車塚古墳[注8]のように、墳丘の周囲に等間隔でめぐる事例が確認できる。これらは、墳丘に樹立された埴輪との関連で考えねばならず、木柱単独での樹立でないことが認識できよう。埴輪自体の用途としては、墳墓の象徴としての意義も考えられるが、基本的には墳丘がある種の聖域であり、概念の上で俗域と区画するために樹立されたと考えて大過はない。その埴輪と混在して樹立された木柱にも聖域と俗域を区画する概念があったと考えられる。これと類似する例として京都府芝山３号墳[注9]を挙げることができる。芝山３号墳は、一辺8mの低墳丘方形墓[注10]で、周溝の一隅が陸橋状に掘り残されており、その陸橋部を挟み込むように柱穴が周溝内に穿たれている。聖域である墳丘と俗域を区画するには、周溝がその用を果たしているが、陸橋状の掘り残し部分は、概念の上からも聖域として区画できない。その区画のために陸橋部を挟み込むように木柱を樹立したと考えられる。現時点では、このような類例は確認できないが、今後、資料の増加により類例が増加するであろう。

次の事例としては、複数あるいは単独で墳頂部及びその周辺に木柱が樹立される場合である。土生田純之が事例報告した福岡県鋤崎古墳の横穴式石室の墓道中央で確認されたピットや京都府加悦町蛭子山古墳[注11]の墳頂部のピットなどが該当する。これらの柱穴は、墳丘の中心部分に樹立されている点から考えて、聖域を区画する目的によって樹立されたものとは異なり、象徴的な意味をもっていたと考えられる。その意味について土生田純之は、「亡き祖霊の依代」として解釈されている。James G. Frazerが解明したような概念が、古墳時代の木柱に受け継がれていることは十分に想定でき、墳頂部に樹立された木柱は、葬送自体に深く関連したものであることが理解される。

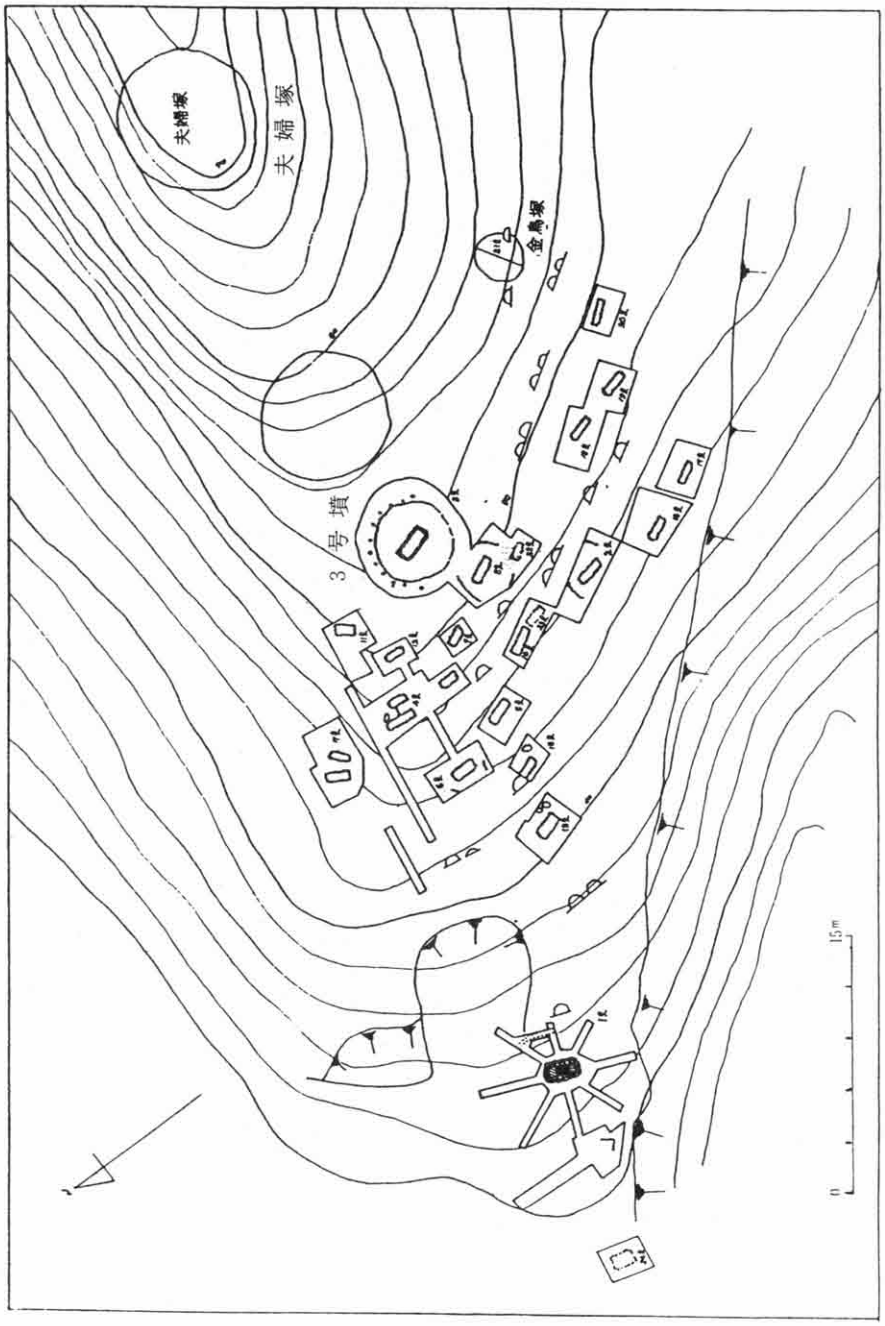
最後の事例としては、墳丘の周囲に等間隔にめぐったり、墳頂部に象徴的に樹立されない極めて特殊な例である。京都府木津町瓦谷古墳[注12]では、墳丘の裾部に３ないし４本の柱穴が確認されている。前方後円墳や方墳・円墳では、正面観を何らかの方法によって表現することが、葬送儀礼やその後の執り行われる墓前儀礼に必要な条件であることが容易に推定される。それを表現する目的をこれらの柱穴がもっていたと考えられよう。

以上のように、木柱樹立には、少なくとも３種以上の異なった概念が存在したことを調査事例から類推することができたと思う。これらの概念が、同時に存在した可能性は十分考えられ、それぞれの系譜を類例調査によって明らかにする課題が残されたと言えよう。

木柱樹立の起源については、土生田純之・高橋美久二によって、その系譜関係に関する論文が提出されている。基本的には、中国・朝鮮半島の２系統に分類することが可能であるが、先述したように、木柱樹立の起源のみを考察することは、樹立される場が古墳の墳丘であることから、墳丘の成立や埴輪の樹立起源とともに考えなければならないであろう。

このような視点から朝鮮半島における一例を提示しておきたい。

韓国慶南梁山郡梁山邑北亭里山702番地一帯と同新基里山31番地一帯には、韓国の三国時代文化を代表する墳墓で著名な夫婦塚古墳や金鳥塚古墳が所在し、それに隣接するように50余基からなる北亭里古墳群・新基里古墳群が築造されている。その中にあって北亭里第３号墳[注13]の墳丘裾から、木柱を樹立したと考えられる柱穴が確認されている。調査を担当された東亜大学の沈奉謹教授は『梁山夫婦塚、金鳥塚と周辺の古墳群』という報文中で「(略)特に、第３号墳の周囲で発見された木柱痕跡は、我が国で初めて発見されたもので、墳丘に隣接するように木柱を立て、禁忌列を設置したらしい。慶州掛陵のように統一新羅時代の王陵に石柱を立てることとの関係は、ともするとこれが始源的である可能性が高い。(略)」と論じた。また、出土遺物と石室構造から北亭里古墳群が６世紀前半から中葉にかけて築造されたことを言及した。墳丘の周囲に樹立されている点から、聖域を区画するために樹立された可能性が高いと言えよう。



第１図　韓国梁山北亭里古墳群遺構配置図（注13より転載・加筆）

日本の古墳に樹立された木柱の起源を考える上で北亭里第3号墳は、重要な根拠を提示している。築造時期は、６世紀前半であり、直接的に木柱樹立の起源とはならないが、朝鮮半島でも木柱を樹立する行為が存在し、以後、石柱へと継承されている点は、重要視すべきであろう。

４．まとめ

古墳に樹立された木柱には、次の３種の異なった概念が存在することが明らかになった。まず、墳丘という聖域を区画する概念、次に「亡き祖霊の依代」としての概念、そして、墳丘の正面観を表示する場合の概念、それらの導入時期や系譜については、今後の類例の増加によって明らかになる部分もあると考えられる。また、木柱樹立の起源は、中国や朝鮮半島に求めても大過はないと考えられる。その一例として、韓国慶南梁山郡梁山邑北亭里に所在する北亭里第3号墳を概観した。6世紀前半の築造時期であるから、木柱樹立の起源にはならないが、共通する概念のもとに木柱が樹立された事実は、墳丘上に樹立された木柱と何らかの関連があるものと考えられる。

木柱樹立が、弥生時代の系譜を引くことについては、十分に検証されておらず即断できないが、この問題を理解するには、前方後円墳の起源と密接な関連があると考えられる。金関恕[注14]は、前方後円墳の起源を弥生時代の祭場に関連があると考え、その祭場の周囲に鳥形木製品を樹立する行為自体が、朝鮮半島に広く行われていた「蘇塗」と深く関連していることを指摘した。仮に、前方後円墳の祖型が弥生時代の祭場にあり、その祭場の周囲に鳥形木製品や木製樹物が樹立されたとするならば、古墳時代の全般を通して確認される木柱の樹立もその系譜上にあるとするのが妥当と考えられる。前方後円墳の多くが３段築成であることや木柱を樹立することが、享堂建築の思想の導入によって生じたとする説は、前方後円墳の成立にも深く係わることであり、弥生時代以来の系譜の中で前方後円墳を捉えることが、妥当と考えておきたい。

木柱樹立の起源については、多くの問題点が指摘されている。今後、中国や朝鮮半島での類例が増加することによって、その系譜が徐々にではあるが明らかになるものと考えられる。なお、本文では、木柱樹立の起源について、諸説を提示しながら私見を述べたにすぎない。今後、類例の増加をまって、あらためて考察したいと思う。

（こいけ・ひろし＝当センター調査第２課調査第２係調査員）

注１　小池　寛「聖域区画小考」（『京都府埋蔵文化財情報』第38号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1990

注２　フレイザー『金枝篇』 岩波文庫　1952(永橋卓介訳)

注３　曽布川寛『崑崙山への昇仙』　中公新書　1981

注４　近江昌司「館蔵「扶桑図磚」について－藤ノ木古墳出土冠に関連して－」(『天理参考館報』第２号　天理大学附属天理参考館)　1989

注５　土生田純之「古墳における儀礼の研究－木柱をめぐって－」(『九州文化史研究所紀要』第36号　九州大学文学部)　1991

注６　高橋美久二　「木製の埴輪」とその起源」(『古代の日本と東アジア』　小学館)　1991

注７　立命館大学文学部「鴨谷東古墳第４次発掘調査現地説明会資料」　1990

注８　高橋美久二ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』　京都府教育委員会)　1980

注９　小池　寛「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第25冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注10　小池　寛「低墳丘方形墓小考－用語の概念規定－」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991

注11　「史跡蛭子山古墳第４次発掘調査現地説明会資料」(『加悦町文化財調査現地説明会資料』13　加悦町教育委員会)　1990.10.20

注12　伊賀高弘氏の教示による

注13　沈奉謹「梁山夫婦塚、金鳥塚　周邊古墳群」(『제４회한국상고사학회학술발표회』한국상고사학회)1990

注14　金関　恕「前方後円墳のなぞ」(『古墳の謎を探る』　帝塚山大学考古学研究室)　1981ほか

研　究　ノ　ー　ト

阿婆田窯跡群の須恵器

－重ね焼き技術の検討を中心に－

森　　正

1．はじめに

阿婆田窯跡群は、京都府中郡大宮町字善王寺に所在する総数15基程度と推定される須恵器窯跡群である。当調査研究センターでは、平成元年度に国営農地開発事業に伴い、C支群の6基の窯体の発掘調査を行った。調査における事実関係等は、すでに刊行した調査概報で述べている(注1)が、今回は概報でふれることのできなかった焼成技術、特に重ね焼き技術の問題についての検討を行いたい。

阿婆田窯跡群は、8世紀初頭から後半にかけて操業を行っており、出土須恵器についても前回報告において阿婆田Ⅰ期から阿婆田Ⅲ期の3期に分けられることを示した。このなかで、阿婆田Ⅱ期とⅢ期の間に土器型式上では最も大きな画期が想定でき、この画期は8世紀中頃にあたるものと考えている。

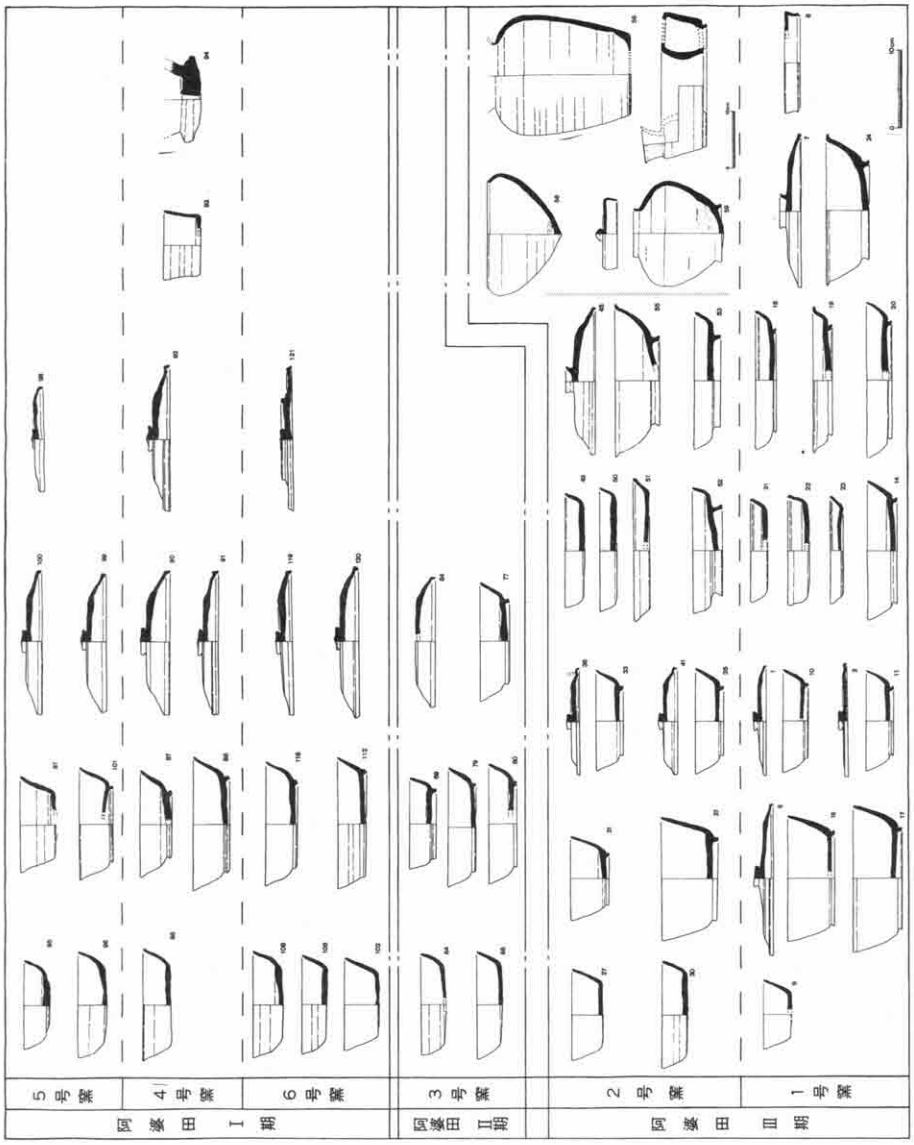
まず、各段階の須恵器について簡単にふれた後に、杯Bの重ね焼きの状況についての検討を行う。

2．阿婆田窯跡群出土須恵器の各段階

今回調査を行った6基の窯は、いずれも灰原がすでに流失しており、窯体のみの調査となった。このうち1・2・6号窯の3基については、窯体内に最終操業に伴う須恵器が比較的よく残されていた。須恵器の残存状況に粗密があるものの、各窯体の床面出土須恵器について、すべての破片をチェックし、器種組成及び器種別固体数の算出を試みた。その結果、3号窯が資料的に少なくやや不安材料が残るものの、全体を通じては大方の傾向を把握することができた。

①阿婆田Ⅰ期

5・4・6号窯の3基をⅠ期とする。この段階では、数量的に主体となる法量の杯Bは大形で、いずれの窯でも口径17～18cmを測る。形態的には、杯底部と体部の境は鈍く屈曲して丸みを帯びる。口縁部も丸みを帯びて外反し、緩い「S」字状を呈する。高台の



付表　阿婆田窯跡群出土須恵器編年表(試案)

形態は、４・５号窯では比較的高く、外方に強くふんばって内端辺で接地する。法量は、両窯ともにほぼ２法量存在する。６号窯では杯Ｂの器高が低いものが主体となる。高台は内端辺で接地するものが主体であるが、高台端面で接地するものもある。蓋については、器高の高いものが多く、つまみは扁平な擬宝珠様を呈する。口縁端部は、下方へ短く折り返すが、４号窯の資料中には、いったん上方につまみ上げてから下方へ折り返す特徴的な形態のものが存在する。杯Ａについても全体に丸みを帯びるものが多く、口縁部も外反する傾向が認められる。６号窯でも丸みを帯びる杯ＡⅡが主体である。

②阿婆田Ⅱ期

３号窯をⅡ期とする。Ⅰ期に比べ法量にばらつきが見られるものの、杯Ｂの法量は口径15～16cmに中心があり、若干縮小する。杯底部と体部の境は、やや明瞭に屈曲し、口縁部もほとんど外反せずに直線的にのびる。高台は、短く内端辺で接地するものと、端面がくぼみ、面で接地するものがある。杯Ａは、丸みを帯びるものも存在するが、底部と体部の境が明瞭に屈曲するものが主体となる。

③阿婆田Ⅲ期

２・１号窯の２基の窯をⅢ期とする。杯Ｂは、３ないし４法量に分化している。そのなかでも両窯ともに主体となる法量は、口径13～14cmとほぼ同じで、Ⅱ期に比べさらに縮小している。２号窯の杯Ｂは３法量に分かれ、このうちＢⅠとＢⅡは、径高指数がほぼ等しく、法量による規格品の出現が認められる。１号窯でも４法量が確認でき、ＢⅠ・ＢⅡは、ほぼ同じ径高指数を示す。形態的には、底部と体部の境が明瞭に屈曲し、体部は緩やかに内湾する傾向が認められる。高台は、短くやや外方にふんばり、端面で接地するものが大半である。蓋は、２号窯ではやや器高が高く、丸みを帯びた方柱状のつまみを持つものが主体である。口縁部は、「Ｚ」字状になる傾向がある。１号窯では、器高が低く、ほとんど扁平になり、つまみも丸みを帯びた扁平なものになる。このⅢ期においては、前段階に比べ法量による器種分化が明瞭になり、加えて皿Ａ・皿Ｂ・椀等の新器種の出現など食膳具の構成に大きな変化が認められるとともに、壺・鉢等多彩な器種が加わり、前段階とは大きな画期が認められる。

以上のように、６基の窯体出土須恵器を主に杯Ｂの形態変化をもとにして、大きく３期に分けて考えた。型式変化の方向としては、まず主体となる法量の縮小傾向がある。特にⅢ期では３ないし４法量に法量分化し、数量的に主体となるものの法量がもっとも小さくなっている。高台の形態では、高くふんばり、内端辺で接地するものから短く端面で接地するものへ変化する。なかでもⅡ期からⅢ期の間では、杯Ｂの型式変化に加え、器種組成

上の変化をも伴っており、大きな画期として設定することが可能である。

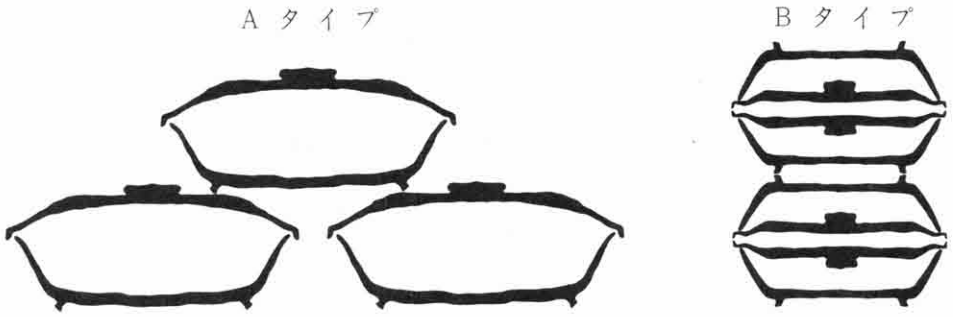
3．重ね焼き方法の検討

各窯体内には、多少の差があるものの最終操業に伴う須恵器が残されていた。このうち、杯Bについて重ね焼きの方法を観察したところ、時期によって変化のある点が判明した。以下に、各窯体出土の杯Bについて、阿婆田Ⅰ期から順に、時期ごとに重ね焼き方法をみる。その際、重ね焼きの状況で融着しているものについては直接重ね焼きの状況を知ることができるが、このような場合以外でも、焼成の際に生じる器表面の色調の違い、あるいは灰の降着状況などから、間接的に重ね焼きの状況を復原することが可能である。(注2)

阿婆田Ⅰ期　杯身には、セットになる蓋が正位で重ねられている。この状況は、重なった状況で出土したものもあるが、蓋見込み内面に、色調の変化が線として認められるためである。さらに、この単位を上方へ積み上げる方法については、杯蓋天井部外面に杯身高台径とほぼ一致する径の色調変化が２か所に認められるものが多く、中心からずらせて、上方へ互い違いに積み上げていた状況を復原できる（Aタイプ）。ただし、杯蓋外面には、つまみを中心にして、つまみ径よりやや大きい径の色調変化線が認められる個体もあり、中心に他の器種を積んでいるものも存在したようである。Ⅰ期に属する３基の窯体とも同様の状況を確認することができる。

阿婆田Ⅱ期　３号窯では杯Bの出土数が少ないが、融着した破片のなかに、蓋の口縁部を合わせた状態のものがあるため、重ね焼きの方法としては、Ⅰ期とは異なり、後に述べるⅢ期と同様の方法であるものと考えられる。

阿婆田Ⅲ期　１・２号窯ともに融着固体及び器表面の色調変化からみて、セットになる身に蓋を逆位でのせて、この上に蓋を正位であわせ、さらにこの蓋とセットになる身を逆位でかぶせる状態を復原できる。この上には順次同様の状況で、積み重ねていたものと考えられる（Bタイプ）。



第１図　杯B重ね焼き模式図

以上のように、各窯体出土須恵器のなかでも、杯Bの重ね焼き方法は、阿婆田Ⅰ期からⅡ期のなかで変化している状況が確認できる。Ⅱ期の資料が少ないものの、その傾向としては、８世紀前半から後半にかけての時期、中頃には変化しているものといえよう。

４．まとめにかえて

前回報告では、土器の型式上及び器種構成の面からみて、Ⅱ期とⅢ期の間に大きな画期が設定可能であるものと考えたが、重ね焼き技術の面から見ると、Ⅱ期の資料中にⅠ期とは異なる方法が採用されている点が確認できる。Ⅱ期の資料を過渡的な状況と見るならば、やはり８世紀中頃には、重ね焼き技術を含めた生産技術上の変化が想定できる。

今回検討を行った重ね焼き技術の問題については、石川県内で詳しい研究が行われている(北野1988、木立1988など)。なかでも木立の指摘する「器種と重ね焼きはセットとして一つの系譜を形作っていた可能性が高い」という状況は、今回報告の阿婆田Ⅱ期の器種構成が明確でないため、にわかには判断し難い。しかし、今回確認した資料については、杯Bの重ね焼きの方法は、１基の窯について１種類のみであり、その方法が、時期の変化に対応して変化している点を指摘することができる。すなわち、阿婆田Ⅰ期の５・４・６号窯についてはAタイプ、Ⅱ期及びⅢ期の３・２・１号窯についてはBタイプの重ね焼きを採用している点である。このことから見て、Bタイプの重ね焼き方法が、新器種とセットになって導入されたものかどうかは、今回の資料では今一つ明確にできない。しかし、両者に時間的なズレが存在する可能性は残るものの、Bタイプの重ね焼きが新技術として採用されている点からも、８世紀中頃の須恵器生産技術上の変化の一側面として考えられる可能性は高い。

また、杯蓋の形態に注目した場合、Ⅲ期のものでは口縁端部が「Z」字状に屈曲するものの割合が非常に高い。これは、Bタイプの重ね焼きを行うことによって、蓋の口縁端部外面に杯身の口縁端部が重なり、積み重ねた際の加重によって端部が「Z」字状に屈曲するものと見ることができる。こういった杯蓋に見られる形態上の新しい特徴も、重ね焼き技術の変化に起因するものと考えられる。

阿婆田窯跡群の資料については、以上のような点を指摘することができたが、これがより広範な地域での特徴として指摘し得るのかどうかについては、集落遺跡の資料も含めた、詳細な検討が必要になろう。さらに、今回の検討では、重ね焼き方法の変化を、およそ８世紀中頃に想定したが、これは北野氏が能美窯跡群の状況で指摘した、重ね焼き方法の２回の画期のうち、古い段階のものと一致する。新しい段階の画期については、さらに周辺の資料の検討を行わなければならないが、阿婆田窯跡群と同じ大宮町に所在する三坂谷窯

跡の表採資料中に、無鈕の杯蓋が柱状に重ねられ、融着しているものがあり、断片的な資料ながらも概ね9世紀には、重ね焼き方法に変化があるものと言えよう(森下・岡田　1985)。特に9世紀の状況については、平安京を控えた南丹波の篠窯跡群の状況と密接にからむものと予想されるが、丹後地域での資料も少なく、今のところ状況を明らかにすることはできない。

以上、阿婆田窯跡群の資料をもとに重ね焼き技術の状況を若干整理してみたが、先学諸兄の行った詳細な研究に負うところが大きく、丹後地域での一状況を確認したにすぎない。しかし、一生産地における技術上の変化を確認できたことの意義は小さくなく、今後周辺各地域での状況を確認していくことにより、生産技術の系譜・地域性等明らかにし得るものと予想される。

(もり・ただし＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1　森　正・斎藤　優「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成2年度発掘調査概要(1)阿婆田窯跡群」(『京都府遺跡調査概報』第44冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991

注2　観察にあたっては北野氏の行った詳細な観察分類案にもとづいた。

参考文献・引用文献

北野博司　1988　「第3節　1)　古代の土器」(『辰口西部遺跡群』Ⅰ　石川県立埋蔵文化財センター)

木立雅朗　1988　「第4節　竹生野遺跡出土須恵器について」(『竹生野遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター)

森下　衛・岡田晃治　1985　「大宮町三坂谷窯跡の須恵器」(『太邇波考古』第5号　両丹技師の会)

平成３年度発掘調査略報

1．小谷17号墳

所 在 地　船井郡八木町本郷

調査期間　平成３年５月21日～７月29日

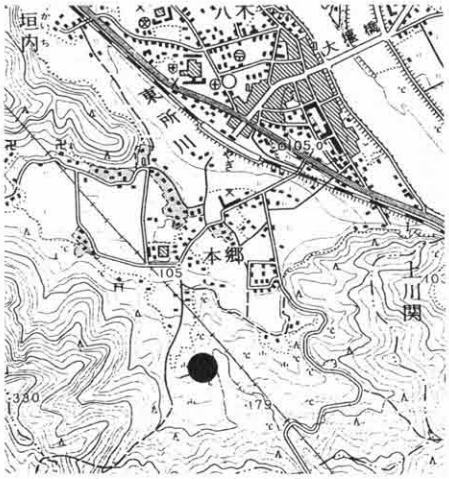
調査面積　約300㎡

はじめに　今回の発掘調査は、国道９号バイパスに伴う事前調査として建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。小谷17号墳は、八木町南端部の亀岡市との境となる丘陵の北側の谷部斜面に位置しており、平成元年度の当調査研究センターの調査によってその存在が判明した。

調査概要　一昨年度の発掘調査の結果、小谷17号墳は横穴式石室をもつ古墳であることが確認されたが、石室の天井石はほとんど抜き取られており、玄室内にずれ込んでいた壁体の積み石を取り除きながら副葬遺物と床面の検出を行った。

石室は、その平面形が長さ約2.1m・幅約1.9mの正方形に近い玄室で、幅約0.7mの短い羨道を付設した右片袖の小形の石室であった。なお、羨道部の閉塞石は完存しており、副葬品はそのほとんどが追葬時の状態で出土した。

主な出土遺物として、須恵器(杯身・杯蓋・有蓋高杯・壺・提瓶など)、土師器(壺・ミニチュア土器)、鉄器(刀・鉄鏃・刀子・鉄鎌・鉄斧・辻金具・轡など)、玉類(切子玉・勾玉・棗玉・丸玉・小玉)などが出土した。また、棺台と考えられる石や梱石が床面で検出された。副葬された須恵器は田辺編年によるとＴＫ10型式から一部ＴＫ43型式に該当し、２～３回の追葬が行われたと考えられる。なお、玉類と鉄器の大部分は初葬時に副葬されたと判断できる。



調査地位置図（1/50,000）

石 室 全 景

まとめ　小谷17号墳は、その石室形態や出土した遺物からみて、６世紀前半に築造された横穴式石室をもつ古墳であり、八木町の周辺に所在する拝田16号墳（亀岡市千代川町字拝田）や医王谷３号墳（亀岡市下矢田町字医王谷）などとともに、丹波地方に横穴式石室が導入され始めた時期のものである。また、小谷17号墳の石室の全体の状況は不明だが、出土遺物は追葬時のままに残っていたと考えられ、丹波地方における古墳時代後期の貴重な資料になると考えられる。

（野島　永）

2．平安宮大極殿院跡

所 在 地　京都市上京区千本通下椹木町東入ル上ル小山町

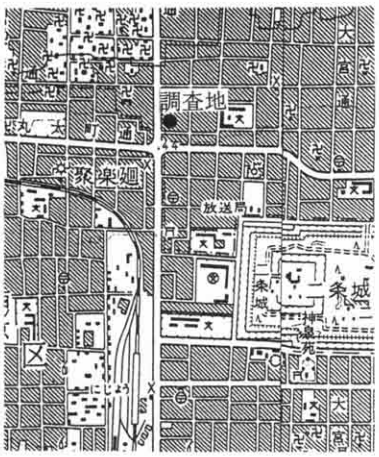
調査期間　平成３年４月15日～５月21日

調査面積　約85㎡

はじめに　今回の調査は、きょうと社会保険センターの増改築工事に伴うもので、京都府福祉部保険課の依頼を受けて実施した。調査地は、過去の調査成果から、平安宮大極殿院の北回廊にあたると考えられる。すぐ西隣りでは、(財)京都市埋蔵文化財研究所の調査により、北回廊基壇の南北両端部が確認されている。

調査概要　最初に、現地表下約1.3mまでの江戸時代後期から現代にかけての盛土を重機で除去し、その後、人力で掘削・精査を行った。その結果、土坑などの遺構を検出したが、時期のわかる遺構はすべて江戸時代以降のものである。それ以前の明確な遺構はなかった。また、調査地全体にわたって、地山のかなり深い部分まで土取りのため削り取られた状態であった。調査地東側に、南北方向に地山が削り残された部分があり、固く締まった細礫層がその上にのっていた。基壇盛土の可能性があるため細礫層を掘削したが、出土遺物はなく、盛土と断定するまでにはいたらなかった。

出土遺物は、緑釉瓦などの平安時代前期から後期にかけての瓦片と、江戸時代の陶磁器類が、主なものである。平瓦片には、「右坊」の押印のあるものも含まれている。江戸時代の陶磁器では、土坑出土の17世紀後半頃の肥前磁器が注目される。



調査地位置図（1/25,000）

まとめ　今回の調査地は、過去の調査成果からみると、大極殿院北回廊基壇内の南寄りに位置するが、明確に北回廊基壇に関係する遺構はなかった。江戸時代の遺構や土取りの削平は、かつて基壇南北両端部が検出された標高よりもかなり低くにまで及んでいる。したがって、北回廊の遺構は、削平されて残存していないものと考えられる。

（引原　茂治）

３．史跡教王護国寺境内

所 在 地　京都市南区九条町399

調査期間　平成３年６月10日～７月15日

調査面積　約40㎡

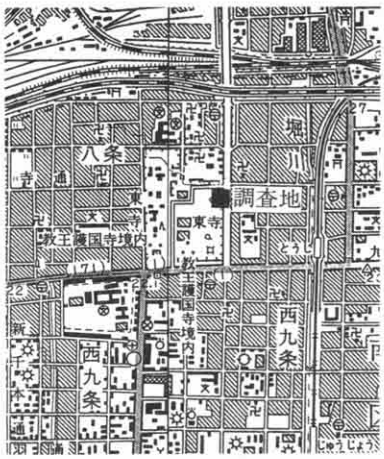
はじめに　今回の調査は、東寺前警察官派出所新築工事に伴うもので、京都府警察本部の依頼を受けて実施した。調査地は、平安京左京九条一坊にあたり、平安京遷都時に西寺とともに官寺として建立された東寺の境内地に相当する。調査地の位置は、慶賀門の南東側隣接地・築地塀の東側で、境内からみれば、東側築地塀の外である。かつて、平安博物館によって南側隣接地が調査され、築地基壇や礎石が検出されている。

調査概要　最初に旧建物の基礎や近・現代の盛土・攪乱土を重機によって除去し、その後、人力で掘削・精査を行った。調査地は、近・現代の攪乱が著しく、ことに南東側では、現地表下約１ｍ前後まで攪乱されていた。

今回の調査では、築地塀側の調査地西側で13世紀前後の築地基壇に伴うと考えられる地山の削り出しや盛土、及びそれ以降の盛土や雨落ち溝と考えられる溝状遺構などを検出した。また、調査地東側では、大規模な溝状遺構を検出した。この溝状遺構は、底部からの出土遺物から、江戸時代初期には存在したことが考えられる。当調査研究センター理事藤井学氏のご教示によると、平安京当時から存在した「大宮川」であろうということである。

出土遺物は、平安時代から近世にかけての瓦類が、主なものである。瓦類のなかには、「左寺」銘のある軒平瓦や緑釉瓦片が含まれている。

まとめ　現在の築地塀の基底部と慶賀門の基壇上面はほぼ平坦に続く。今回検出した盛土の状況からみて、かつては、築地塀基底部と慶賀門基壇上端部に段差があり、慶賀門付近で、築地塀基壇が慶賀門基壇に向かって傾斜して上がっていたと考えられる。また、大規模な溝状遺構は、平安博物館の調査で検出されたものの北側延長部にあたると考えられる。　（引原　茂治）



調査地位置図（1/25,000）

資　料　紹　介

高山12号墳出土の鐔

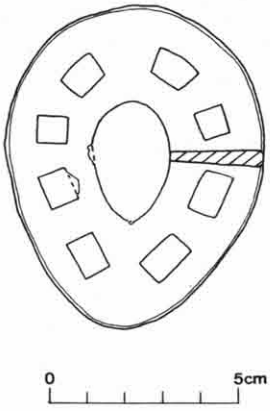
増　田　孝　彦

ここに紹介する資料は、昭和61・62年度に調査を実施した京都府竹野郡丹後町徳光小字高山ほかに所在する高山古墳群(高山12号墳)から出土した鐔である。『京都府遺跡調査概報』第29冊(1987)に記載もれとなっていたため、今回図示することとした。

高山古墳群は、横穴式石室を内部主体とする９基の古墳からなり、うち８基調査を実施した。その結果、いずれも６世紀後半～７世紀初頭に築造されたことが明らかとなった。これらの古墳からは、鉄製品・装身具・土器等多くの副葬品が出土しており、１号墳から鉄地金銅張雲珠、３号墳から銀製の喰出鐔と鎺が一体になった大刀が出土している。

鐔の出土した高山12号墳は、直径18mの円墳で、西側に袖をもつ片袖式横穴式石室を内部主体とし、ほぼ南に開口する。石室全長12.15m・玄室長6.45m・玄室幅2.1～2.25m・同高2.9mを測り、羨道長6.45m・玄門部幅1.75m・羨道最前端幅2.22m・同高1.7mを測る。高山古墳群中最大規模を誇り、丹後半島内でも最大級クラスの石室である。石室内出土遺物の総数は、整理が進むにつれ若干増加し、490点を越える。中でも、金銅装双竜環頭大刀柄頭２点、金銅装喰出鐔、象嵌を施した円頭大刀柄頭や刀装具、鉄地金銅張辻金具・鞍金具・革金具等の装飾性の高い刀装具や馬具は特筆される。また、全国で７例目の出土となった特殊偏壺は、その分布からも注目される。

鐔は、玄門から閉塞石の間の多量に鉄器が集中する部分で出土した。ほぼ完形で長径8.6cm・短径6.9cm、中央付近での厚さ約0.3cmを測り、倒卵形を呈し、断面は板状を呈する。周囲に長方形、方形？、台形状？の透窓８孔を穿つ。多数の透窓を持つものとしては、３号墳から13孔穿つ大型の鐔が１点出土している。12号墳出土の刀は、残存する切先から考えると、最低10点以上の刀があったようだが、鐔は図示したものを含め４点しか出土していない。その他、数が増加したものとして、ガラス玉２、管玉１、革金具１、鉄鏃５がある。



鐔実測図

(ますだ・たかひこ＝当センター調査第２課調査第１係主任調査員)

資　料　紹　介

埋もれた縄文土器(1)

―正垣遺跡・谷内遺跡―

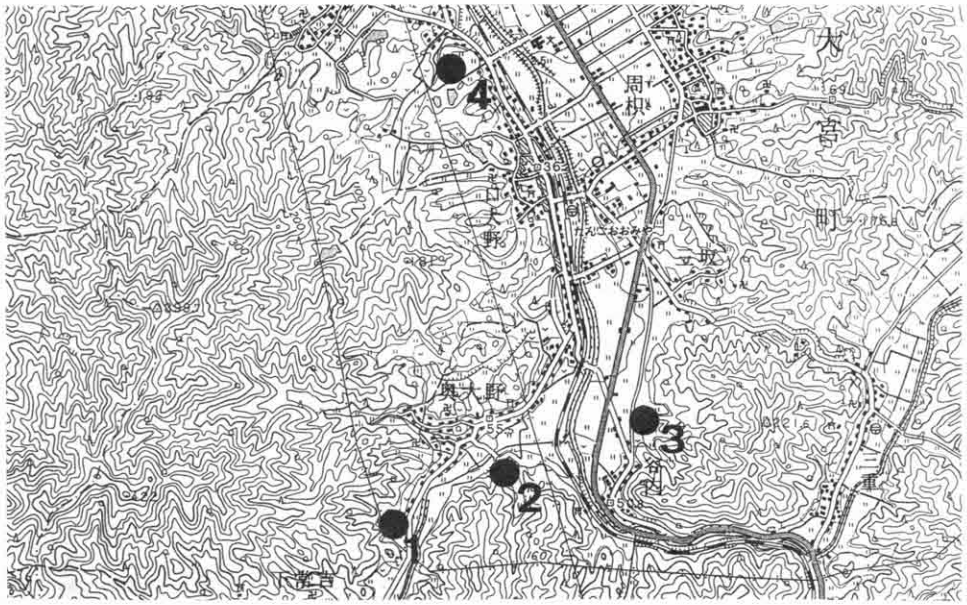
三　好　博　喜

1．はじめに

ここ数十年の発掘調査の件数は、急激な伸びを示しており、多くの成果を挙げてきている。こうした状況の下、近畿地域における縄文時代の資料も飛躍的な増加を見せているものの、出土地点や時期に偏りが認められる。京都府内での調査をみると、縄文時代の土器の出土量自体少なく、その稀少さから大半は資料化されてきている。しかし、なかには種々の事情から、簡単な記述のみや写真掲載だけのものも多い。また、採集されたままで、公表されていない資料も少なからずあるものと思われる。

京都府内での縄文研究を進める上で、一つの方法として、埋もれた資料の再発掘が必要な作業となる。今回は、京都府中郡大宮町正垣遺跡及び谷内遺跡出土の資料を取り上げた。

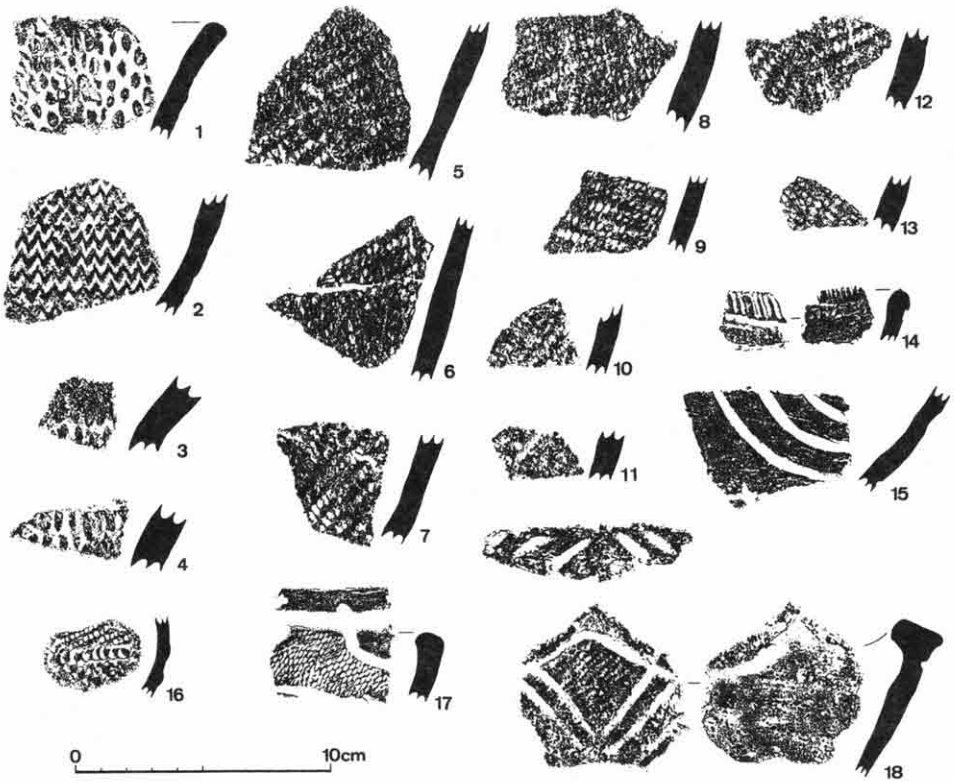
2．出土資料の概要



第１図　関係遺跡位置図（1/50,000　宮津）
１．正垣遺跡　　２．裏陰遺跡　　３．谷内遺跡　　４．菅外遺跡

正垣遺跡及び谷内遺跡[注1]は、竹野川上流部の常吉川と合流する地域に当たり、標高50mから60mを測る位置にある。正垣遺跡は昭和60年度から昭和61年度にかけて、当調査研究センターによって調査が行われている。出土した縄文土器については、簡略な記述がなされている。谷内遺跡は昭和61年度から昭和62年度にかけて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターと京都府教育委員会[注2]とにより４回調査された。４次調査で出土した押型文土器は、すでに詳細に報告されている[注3]が、１次調査でも縄文土器片が出土したとの記述がある。

正垣遺跡出土資料(第２図１～15)　１～４は、押型文土器である。１は、楕円形押型文を施した口縁部の資料である。器厚７㎜を測る。２は、山形押型文を施す資料である。器厚９㎜を測る。３・４は、ともに長楕円形の押型文を施した器厚12㎜を測る資料であり、同一個体と思われる。３は外反しており、頸部付近の資料である。５～13は、ＲＬの縄文を施した土器である。いずれも器厚７㎜前後を測り、出土地点・胎土・色調が酷似していることから、同一個体と考えられる。14は、口縁端部に粘土紐を貼り付け、半截竹管状工具で刺突を加えている。15は、沈線文を施す土器である。４本の沈線がみられる。



第２図　出土遺物拓影
1～15．正垣遺跡出土　　16～18．谷内遺跡出土

谷内遺跡出土資料(第２図16～18)　16は、羽状縄文を地文として、突帯上に爪形刺突を加えている。17は口縁部で、縄文を地文として沈線文を施す。18は、波状口縁を呈する土器の波頂部である。外面は沈線文で区画を行い、縄文を施している。内面には条痕調整が認められる。口縁端部には粘土帯を貼り付け、口唇は棒状工具で押圧を加えている。

３．おわりに

１～４の押型文土器は、すでに報告されている裏陰遺跡や谷内遺跡４次調査で出土しており、土器型式的にも同時期のものである。京都府北部の押型文土器の出土状況をみるとほぼ与謝郡・中郡地域に集中しており、約10遺跡を数える。いずれも黄島式併行期から高山寺式期にあたる。各遺跡での出土量は、わずかにすぎないが、京都府内での押型文土器を扱ううえでは、注目すべき地域と言える。

５～13の縄文施文の土器は、早期末と思われる。この時期の縄文施文の土器は、裏陰遺跡で数多く出土しており[注4]、網野町宮ノ下遺跡出土の土器との関連を考慮すべき資料である。近畿北部の早期後半の土器編年には不明な点も多く、この時期の資料の増加が望まれる。

14～18は、前期から後期にかけての土器片である。正垣遺跡や裏陰遺跡・谷内遺跡では、早期の土器量に比べて、この時期の資料が極端に少ないと言える。大宮町内では、今年度の菅外遺跡の発掘調査で中期から後期にかけての遺物や遺構が検出されている。時期が変わることによって居住域も変遷していることが窺え、今後とも地道な調査を期待したい。換言すれば、正垣遺跡や裏陰遺跡・谷内遺跡の位置する大宮町南部地域は、早期の状況が把握できる地域として特筆されるのである。

（みよし・ひろき＝当センター調査第２課調査第２係調査員）

注１　竹原一彦・藤原敏晃「府営圃場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第22冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注２　奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和61年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』　京都府教育委員会）　1987
奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和62年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』　京都府教育委員会）　1988

注３　細川康晴「谷内遺跡第４次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第28冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1988

注４　杉原和雄・長谷川達・佐藤晃一「裏陰遺跡発掘調査概報」（大宮町文化財調査報告第１集　大宮町教育委員会）　1979

府内遺跡紹介

52. 海　印　寺　跡

海印寺は、長岡京市奥海印寺明神前・大見坊にあった寺院で、元来はかなり広大な寺域をもち、相当広い範囲に存在したが、現在法燈を伝えているのはその内の一支院である寂照院だけになっている。次にあげる史料から見ても、ここではこれらの寺院全体を総称して海印寺と呼ぶことにしたい。

この寺院の草創については、いくつかの文献史料が残っている。『文徳実録』仁寿元(851)年６月８日条には権少僧都伝燈大法師位道雄の卒伝が書かれており、そこには「初道雄有意造寺、未得其地、夢見山城國乙訓郡木上山形勝称情、即尋所夢山、奏上営造、公家頗助工匠之費、有一十院、名海印寺、伝華厳経、置年分度者二人、至今不絶」とあり、道雄が十院からなる海印寺を公的な経費を得て建立したことが見える。道雄はこの時より以前に海印寺を建立しており、この仁寿元年６月８日より以前の段階で年分度者二人を置くようになったことを示している。

道雄がこの寺院を建立した事情は、『類聚三代格』に収められた太政官符に詳しい。この史料には、道雄の上表文が載せられており、そこには華厳宗を修め、鎮護国家の目的のため、山城国乙訓郡木於山に十院を建立したことが書かれている。この上表文では、十院を総称して海印三昧寺と呼んだとあって、ここで七家八宗を学習したようである。なお、道雄は、この嘉祥４(851)年３月の上表文で海印寺を定額寺とすること、さらに、年分度者二人を置くことを願って許されている。このことは、海印寺が朝廷の肝いりで創建され、国家の尊崇を受けたことを物語っている。

遺跡所在地（1/50,000）

この海印寺が華厳宗の道場と

して創建された経緯からみて、南都東大寺との関係が深いことが推測される。仁平３(1153)年４月29日付け「東大寺諸荘園文書目録」に、「海印寺」とみえ、東大寺の荘園のような扱いを受けていたように見える。また、永暦２(1161)年２月７日付け「東大寺上座円尊家地等処分状」に、「一海印寺田壹町壹段副渡本券等」とあり、やはり東大寺三綱の上座が処分しうる田地の中に海印寺田が存在したのである。このように、海印寺は後々まで東大寺と関係の深いことが指摘できるので、あるいは創建当初からその影響の強い寺院であったことは確実であろう。

また、先の道雄の上表文にもあるように、海印寺は定額寺として認められたことから、国家の庇護を受けたことが考えられる。たとえば、『延喜式』巻26主税には、「諸國出挙正税、公廨雑稲、山城国----海印寺料三千束」が設けられており、国衙から寺料として毎年3,000束の正税が出ていたのである。このことを見ても、朝廷の庇護を受けた寺院であることがうかがえる。

ところが、この海印寺も平安時代の終わり頃には次第に衰退するようになった。仁安２(1167)年３月23日付けで海印寺(文書には戒印寺とある)に宛てられた「摂政家政所下文案」によれば、「右件寺者、別當勝慶相傳私領、敢無異論、□依爲無縁之地、且爲募御威、今相具次第譲□、所寄進　殿下御祈祷所也」とあり、摂政藤原基房の祈祷所として摂関家に寄進されたことが見えている。ここでは寄進の対象とされるほど海印寺の寺勢の衰えているようすがうかがえ、一つの荘園・所領のように扱われており、寄進などの対象としてみられていたことがわかる。

このように、９世紀に国家の庇護のもとに道雄の手によって建立された海印寺ではあるが、12世紀には摂関家に寄進され、荘園のような所領とみなされるようになり、次第に衰退の一途をたどった。鎌倉時代以降になると、創建時の十院の内の一つである寂照院以外は全く衰退してしまい、寂照院が海印寺の法燈を伝える寺院として各種の史料に見えるようになる。

鎌倉時代にはいると、海印寺は寺院としてはますます衰退したが、一方では復興の努力もなされている。『東大寺続要録』巻９に所収された文書によれば、「被院宣偈、山城國海印寺者、道雄僧都之建立、嘉祥明時之定額也、而草創年積、花構空廃、剰近年以降、或爲□領疲力役、或入人家令相傳、以佛地者爲他用者、式律之所禁、格條之所誡也、自今以後、如元爲東大寺別院尊勝院末寺、早企蘭寺一宇之營作、可花厳三昧之練行者、(下略)」とあり、尊勝院院主の宗性宛てに院宣が出されている。院宣の内容からすると、東大寺別院である尊勝院の末寺として海印寺を再興するように命じていることがわかる。この院宣が出されたのが文永２(1265)年のことであり、また他の史料に「海印寺下司職」や「海印寺造

營事」と言った文言が見えたりするので、このあと、遠からずして再興の工事が始まったものと思われる。

室町時代にはいると、再興後の海印寺のようすはあまりはっきりしないものの、東大寺の末寺として一定の興隆はあったらしいことはうかがえる。しかし、京都を中心に応仁の乱が起こると、この海印寺にも兵乱が及ぶようになった。この時の戦乱で、寂照院を残して一山焼亡したと伝えられている。現在は、この寂照院が存続しているが、この寂照院は、江戸時代に入って、真言宗にかわって現在に至っている。真言宗になったのは、海印寺の開祖であった道雄が空海の弟子の一人であったことによっている。

（土橋　誠）

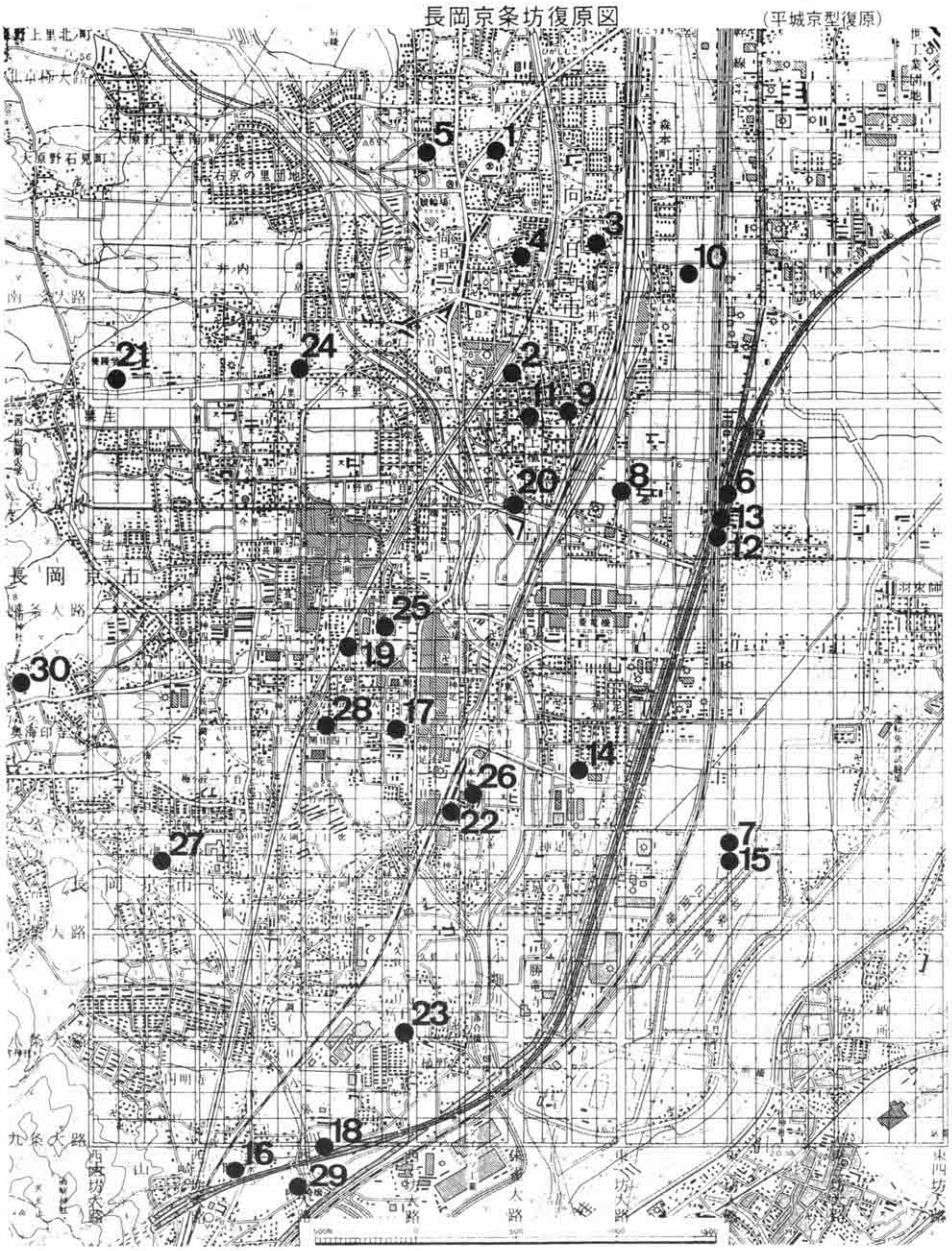
<参考文献>
『東大寺要録』
『東大寺続要録』
『京都府の地名』　平凡社　1981
『角川日本地名大辞典』26京都府　1982
『國史大辭典』3　吉川弘文館　1983
『長岡京市史』資料編一　1991

長岡京跡調査だより・38

平成３年５月21日・６月26日・７月24日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域５件、左京域10件、右京域13件、京外その他２件の計30件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表　　(1991年７月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内256次	7AN11R	向日市寺戸町辰巳3	(財)向日市埋文	4/22～
2	宮内257次	7AN10P	向日市上植野町南開17－6	(財)向日市埋文	5/7～5/14
3	宮内258次	7AN3F	向日市森本町藪路11－1他	(財)向日市埋文	6/1～
4	宮内259次	7AN8G	向日市鶏冠井町荒内80	(財)向日市埋文	6/4～7/6
5	宮内260次	7AN17D	向日市寺戸町中野3－2他	(財)向日市埋文	6/12～7/19
6	左京241次	7ANXVT・XKM	京都市伏見区羽束師菱川町	(財)京都府埋文	4/8～
7	左京251次	7ANYTH	京都市伏見区淀水垂町	(財)京都市埋文	7/9～
8	左京257次	7ANXKM他	京都市伏見区羽束師菱川町他	(財)京都府埋文	6/1～
9	左京264次	7ANFJK－5	向日市上植野町浄徳17－1・5・6	(財)向日市埋文	4/8～4/30
10	左京265次	7ANEJK－2	向日市鶏冠井町上古8－1～13－1	(財)向日市埋文	4/1～
11	左京266次	7ANFMM－2	向日市上植野町円山15－30・32	(財)向日市埋文	4/15～4/26
12	左京267次	7ANXKM他	京都市伏見区羽束師菱川町他	(財)京都府埋文	7/19～
13	左京268次	7ANFWD－2	向日市上植野町脇田	(財)京都府埋文	5/8～7/17
14	左京269次	7ANMST－5	長岡京市神足芝本３－３	(財)長岡京市埋文	4/25～7/20
15	左京270次	7ANMND－1	京都市伏見区淀本通爪町	(財)京都市埋文	4/1～
16	右京349・367次	7ANXYT・XKM	大山崎町円明寺百々・井尻	(財)京都府埋文	4/8～3/8
17	右京365次	7ANKST－3	長岡京市開田二丁目214・215	(財)長岡京市埋文	3/4～
18	右京368次	7ANSID－2他	大山崎町円明寺壱町田他	(財)京都府埋文	4/8～
19	右京370次	7ANKSN－5	長岡京市長岡二丁目429	(財)長岡京市埋文	4/22～6/21
20	右京371次	7ANFDE－7	向日市上植野町堂ノ前14－1	(財)向日市埋文	5/7～5/24
21	右京372次	7ANGAR－5	長岡京市井ノ内朝日寺23他	(財)長岡京市埋文	5/20～
22	右京373次	7ANMNM－2	長岡京市東神足二丁目331－2	(財)長岡京市埋文	6/4～7/6
23	右京374次	7ANTDK	大山崎町下植野代理分10－1	大山崎町教委	5/28～
24	右京375次	7ANIFG－4	長岡京市今里更ノ町43－1・44－1	(財)長岡京市埋文	6/17～7/18
25	右京376次	7ANKAN	長岡京市開田一丁目6－6	(財)長岡京市埋文	6/24～
26	右京377次	7ANMTT－5	長岡京市東神足二丁目1－1	(財)長岡京市埋文	7/3～
27	右京378次	7ANOTJ	長岡京市下海印寺東条11－1	(財)長岡京市埋文	7/8～
28	右京379次	7ANKTN－3	長岡京市開田三丁目401－3他	(財)長岡京市埋文	7/16～9/30
29	算用田遺跡	1K－16	大山崎町円明寺宝本	(財)京都府埋文	5/21～
30	海印寺第1次	7CKPME	長岡京市奥海印寺神前32	(財)長岡京市埋文	7/1～



▽番号は一覧表・本文()内と対応

調査地位置図

宮内第260次(5)

(財)向日市埋蔵文化財センター

宮内北辺官衙及び中野遺跡の調査である。中野遺跡の第2次調査にあたり、縄文・弥生・古墳各時期の土坑、竪穴式住居跡(弥生期3基・古墳期1基)を検出した。立地点は、標高45mの丘陵地にあり、「高地性集落」的性格が与えられる。

長岡京期に属する遺構としては、掘立柱建物跡1と柵列があり、瓦・土器類が出土した。この結果、宮内施設が丘陵部の高所まで確実に存在したことが明らかとなった。

左京第265次(10)

(財)向日市埋蔵文化財センター

左京南一条十二町及び鶏冠井・石田遺跡を対象とする市民プール建設に伴う事前調査。弥生時代から近世に至る遺構が検出されているが、長岡京期の遺構群に特筆すべきものがある。7月末現在で掘立柱建物跡4棟・柵列3条・条坊側溝1条・土坑・瓦溜まり等の遺構が確認されている。建物跡の配置は、梁間3間(10尺等間)×桁行7間(同)の南北両面に廂をもつ東西棟(平面規模21m×18m)の正殿(SB26500)を中心に、北側に後殿、東側に南北棟の脇殿、正殿の南側に八脚門と推測される総柱建物跡が中軸を揃えて並ぶ。また、脇殿東辺に沿って柵列が南北にのび、同じく八脚門から東西にのびる柵列と接続してこれらの建物跡群を区画するものとみられる。建物跡群の中軸は、宅地一町の中軸線と一致し、さらに全体が北側に寄せて配置されていることなどから、宅地の占有は一町以上と想定される。建物跡群の性格については、内裏正殿域に相似する整然とした建物配置や規模・構造等からみて、宮外に設けられた「院」のひとつではないかとする見解が調査側からだされている。この場合、『日本紀略』延暦12(793)年1月21日条に、平安京遷都のため内裏を解体した後の政務の場として登場する「東院」説が有力視されている。調査内容については、7月12日に報道発表、同27日に現地説明会が実施されている。

(辻本和美)

センターの動向（3．5～7）

1．できごと

5．1　太田古墳群（弥栄町）発掘調査開始

7　高田山古墳群（福知山市）発掘調査開始

川向北古墳（園部町）発掘調査開始

8　堤谷古墳群（久美浜町）発掘調査開始

通り古墳群（大宮町）発掘調査開始

森　郁夫京都国立博物館考古室長、上原真人奈良国立文化財研究所主任研究官、瀬後谷瓦窯跡現地指導

14　こくばら野遺跡（久美浜町）発掘調査開始

16～17　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（於：広島市）出席（松阪局長・小林次長・上田主事）

17　平安宮大極殿院跡（京都市）関係者説明会

18　第61回研修会（別掲）

20　小谷17号墳（八木町）発掘調査開始

21　都出比呂志理事、長岡京跡発掘調査現地視察

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（於：東大阪市）出席（松阪局長・安藤課長・今村主事）

乙訓管内府職員研修者、当センター視察

算用田遺跡（大山崎町）発掘調査開始

21　平安宮大極殿院跡発掘調査終了（4.15～）

22　長岡京連絡協議会

26　第42回全国植樹祭「京都みどりの祭典」（於：宇治市）出席（松阪局長）

27　藤原宏志宮崎大学教授、内里八丁遺跡（八幡市）現地指導

30～31　全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（於：埼玉県大宮市）出席（松阪局長・安藤課長・杉江主事）

6．1　堤　圭三郎理事、算用田遺跡現地視察

5　監事監査

7　松阪局長、小谷17号墳現地視察

10　史跡教王護国寺境内（京都市）発掘調査開始

11　下畑遺跡（野田川町）発掘調査開始

13　全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピューター等導入研究委員会（於：岩手県）出席（安田係長、辻本係長、土橋調査員）

京都府内教育局教育課長等当センター視察

18～20　日本考古学協会（於：筑波大）、岸岡貴英、野島　永調査員出席

19　第31回理事会・役員会（於：京都市平安会館）、福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、松阪寛支常務理事、中沢圭二、川上　貢、藤井　学、足利健亮、堤圭三郎の各理事、吉田三枝子監事出席

京都府庁開庁記念式典（於：京都市府民ホール）出席（松阪局長）

20　産業衛生研究会(於：工場保健会)出席(小林次長)

6.20　陝西省歴史博物館開館記念式典(中国陝西省西安市)出席(中谷次長、磯野調査員)

26　長岡京連絡協議会

28　小谷17号墳現地説明会

29　京都府教育関係法人職員懇親スポーツ大会(於：向日市向陽小学校)

7．1　コンピューター委員会

4　史跡教王護国寺境内関係者説明会

5～6　第2回埋蔵文化財写真技術研究会(於：奈良国立文化財研究所)出席(田中調査員)

6　第62回研修会(別掲)

9　藤井　学理事、史跡教王護国寺境内発掘調査視察

10　田中　琢奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長、樋ノ口遺跡等現地指導

11　難波田　徹帝塚山短期大学助教授高田山古墳群・経塚、現地指導

12　川向北1号墳現地説明会

燈籠寺遺跡関係者説明会、発掘調査終了(6.3～)

7.12　小谷17号墳発掘調査終了(5.20～)

15　堤　圭三郎理事、樋ノ口遺跡現地視察

18　足利健亮理事、樋ノ口遺跡現地視察

19　山形県教育委員会鈴木良助教育次長他、当センター視察

堂ノ上遺跡(山城町)発掘調査開始

20　樋ノ口遺跡現地説明会

23　鹿谷遺跡(亀岡市)発掘調査開始

穴澤義功氏(国立歴史民俗博物館)、遠所遺跡現地指導

24　長岡京連絡協議会

25　都出比呂志理事、内里八丁遺跡他現地視察

30　和田　萃京都教育大学教授、樋ノ口遺跡現地指導

下畑遺跡関係者説明会

2．普及啓発事業

5.18　第61回研修会(於：京都社会福祉会館)－京都市内の発掘成果から－

柴　暁彦「伏見城跡の調査」、引原茂治「平安京左京一条三坊の調査」、加納敬二「大原野下西代古墳群の調査」

7．6　第62回研修会(於：八幡市文化センター)－南山城の発掘成果から－

伊賀高弘「木津町瓦谷古墳の発掘調査」、村川俊明「精華町畑の前東古墳の発掘調査」、桝井豊成「八幡市ヒル塚古墳の発掘調査」

(安藤信策)

受贈図書一覧（3.4.16～3.7.31）

釧路市埋蔵文化財調査センター	釧路市武佐川３遺跡、釧路市北斗遺跡　I
苫小牧市埋蔵文化財調査センター	とまこまい埋文だより №23
㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	紀要XI 平成２年度、柳之御所跡、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第148～159集
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて №52
秋田県埋蔵文化財センター	設立10周年記念誌 秋田県埋蔵文化財センター10年のあゆみ、研究紀要 第６号、年報９ 平成２年度、秋田県文化財調査報告書 第203～217集
㈶勝田市文化・スポーツ振興公社	ぶんかざいほごねんぽうフィールドノート Vol.３、㈶勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第４～５集
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団	埋文群馬 №11・12合併号、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団年報８、研究紀要 ８、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第93・114・116～118・120～121集
㈶千葉市文化財調査協会	財団法人 千葉市文化財調査協会年報（１）、千葉市高台向遺跡 千葉市辰ケ台・住吉・東住吉遺跡、千葉市馬場塚遺跡、千葉市へたの台貝塚、千葉市古山遺跡、千葉市迎山遺跡、千葉市山ノ神遺跡、千葉市広南遺跡、千葉市砂子遺跡、千葉市餅ケ崎遺跡、千葉市芳賀輪遺跡、千葉市子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡、立木南遺跡、芳賀輪遺跡・太田アラク遺跡、平川遺跡群
㈶市原市文化財センター	私たちの文化財 15～17、第６回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨、㈶市原市文化財センター調査報告書 第４・14・39～40集、市原市文化財センター年報 昭和61年度、同 昭和62年度
横浜市埋蔵文化財センター	調査研究集録 第７冊、中耕地遺跡、茅ケ崎城、鴨居原遺跡発掘調査報告書、都筑自然公園予定地内遺跡群（２）発掘調査報告書、大塚遺跡－港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 XII－
㈶富山県文化振興財団	埋蔵文化財年報２ 平成２年度、東海北陸自動車道関連発掘調査概報 ２
富山県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第34号
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県埋蔵文化財調査報告 第15集
㈶山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所報 第12号
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告 第41・54・64集
㈶長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財ニュース №28～31、紀要 ２～３、年報 ６～７
㈶浜松市文化協会	浜松市畷東遺跡発掘調査報告書
㈶滋賀県文化財保護協会	滋賀文化財だより №156～157、紀要 第４号、平成２年度調査埋蔵文化財展 レトロ・レトロの展覧会
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第133～135号

㈶大阪市文化財協会	葦火 31～32号
㈶枚方市文化財研究調査会	ひらかた文化財だより 第７～８号
㈶八尾市文化財調査研究会	㈶八尾市文化財調査研究会報告 20
高槻市立埋蔵文化財調査センター	高槻市文化財年報 昭和63年度・平成元年度、高槻市文化財調査概要 XVI
奈良国立文化財研究所	埋蔵文化財ニュース 69・70・72
奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成２年度、奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1990、平城京東市跡推定地の調査 IX
㈶元興寺文化財研究所	㈶元興寺文化財研究所通信 №38
岡山県古代吉備文化財センター	所報吉備 第10号、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 77～78
㈶広島県埋蔵文化財調査センター	ひろしまの遺跡 第44～45号、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第83～84集
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 №212～213、草戸千軒町遺跡 第42・43次発掘調査概要
㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋文えひめ 第13～14号、甦る埋蔵文化財 第４集、埋蔵文化財発掘調査報告書 第38～39集
松山市立埋蔵文化財センター	平成元年度～２年度 松山市埋蔵文化財調査年報 Ⅲ、松山市文化財調査報告書 第21～23集
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書 第143・146～147集
山形県教育委員会	山形県埋蔵文化財調査報告書 163集
米沢市教育委員会	米沢市文化財年報 №４、米沢市埋蔵文化財調査報告書 第28～31集
埼玉県教育委員会	古墳詳細分布調査概報 Ⅰ
大宮市教育委員会	大宮市文化財調査報告 第29～30集
坂戸市教育委員会	坂戸市遺跡群発掘調査報告書 第Ⅲ集
市原市教育委員会	平成２年度 市原市内遺跡発掘調査報告
木更津市教育委員会	木更津市内遺跡発掘調査報告、大畑台遺跡群確認調査報告書、千束台遺跡群確認調査報告書 Ⅱ、請西遺跡群発掘調査報告書 Ⅲ
千葉市教育委員会	埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書－平成２年度－
芝山町教育委員会	平成２年度 芝山町内遺跡群発掘調査報告書（高田２号墳）
袖ケ浦町教育委員会	平成２年度 袖ケ浦町内遺跡群発掘調査報告書
東金市教育委員会	平成２年度 東金市内遺跡群発掘調査報告書
富津市教育委員会	千葉県富津市内裏塚古墳群発掘調査報告書、富士見台遺跡
東京都教育委員会	学芸研究紀要 第８集、東京都埋蔵文化財調査報告 第18集、東京の遺跡展 お江戸八百八町地下探険図録
小平市教育委員会	鈴木遺跡範囲確認調査報告書 平成２年度
金井町教育委員会	金井町文化財調査報告 第８集
能都町教育委員会	棚木城跡遺跡詳細分布調査報告書
小浜市教育委員会	史跡 岡津製塩遺跡環境整備報告
三方町教育委員会	三方町文化財調査報告書 第９集
境川村教育委員会	境川村埋蔵文化財発掘調査報告書 第４輯

長野県教育委員会	リゾート等開発地域内の埋蔵文化財分布調査報告書
佐久市教育委員会	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第１～２集
塩尻市教育委員会	菖蒲沢窯跡発掘調査報告書、中挟・五日市場、二本木遺跡、平出遺跡
松本市教育委員会	松本市文化財調査報告 №88～92、針塚古墳の発掘
王滝村教育委員会	王滝村の文化財 №４
各務原市教育委員会	各務原市文化財年報 創刊号
磐田市教育委員会	静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書、大原墳墓群調査報告書、匂坂中下３遺跡発掘調査報告書、遠江国分寺跡周辺遺跡（国分寺西遺跡）発掘調査報告書、浜部遺跡発掘調査報告書、鎌田・鍬影遺跡発掘調査報告書、玉越遺跡、御殿・二之宮遺跡発掘調査報告書、昭和59年度 見性寺遺跡発掘調査概報、昭和59年度 堂山古墳周堀確認調査報告書、昭和60年度 見性端城寺発掘調査概報、昭和60年度 長江崎遺跡発掘調査報告書、昭和61年度 安久路古窯発掘調査報告書、昭和61年度 堂山古墳後円部・周堀発掘調査報告書、遠江国分寺跡周辺国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書、昭和61年度、同 昭和63年度、同 平成元年度、同 平成２年度、平成２年度 中原Ｃ古墳群発掘調査報告書、平成２年度 匂坂下原古墳群発掘調査報告書、平成２年度 堂山古墳後円部発掘調査報告書
湖西市教育委員会	湖西市文化財調査報告 第24～28集、国道１号線潮見バイパス（湖西地区）宿南№１・№２遺跡確認調査報告書、国道１号線潮見バイパス（湖西地区）宿南№９遺跡確認調査報告書
稲沢市教育委員会	稲沢市文化財調査報告 ＸＸＸⅥ～Ⅶ
瀬戸市教育委員会	愛知県瀬戸市 古瀬戸小西遺跡、穴田南第６号窯跡、穴田第11号墳・種成第４号窯跡
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告書 18
彦根市教育委員会	彦根市埋蔵文化財調査報告書 第19～21集
多賀町教育委員会	多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書 第１・３集
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書 第29～30集
日野町教育委員会	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第７～８集
和泉市教育委員会	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報 1
大阪市教育委員会	平成元年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市文化財報告書 4
河内長野市教育委員会	河内長野市文化財調査報告書 第19輯
泉南市教育委員会	泉南市文化財調査報告書 第22集
高石市教育委員会	文化財調査報告書 高石の仏像、高石市文化財調査概要 1990－1
羽曳野市教育委員会	羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 19
枚方市教育委員会	枚方市文化財調査報告 第24集
藤井寺市教育委員会	藤井寺市文化財報告書 第７集
寝屋川市教育委員会	新聞記事集成編 第一巻、市史紀要 第三巻、寝屋川市史 第八巻
八尾市教育委員会	八尾市文化財紀要 ５、八尾市文化財調査報告 22～23

熊取町教育委員会	熊取町埋蔵文化財報告 第15～17集
島本町教育委員会	島本町埋蔵文化財調査報告書 第１集
阪南町教育委員会	阪南町埋蔵文化財報告 ＸＩ
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告 第21集
尼崎市教育委員会	尼崎市文化財調査報告 第22集
加古川市教育委員会	文化財ニュース №.34
竹野町教育委員会	竹野町文化財調査報告書 第８集
橿原市教育委員会	橿原市埋蔵文化財概報 8
香芝町教育委員会	平成２年度 堂ケ谷遺跡発掘調査概報
田原本町教育委員会	田原本町埋蔵文化財調査年報 1、田原本町埋蔵文化財調査概要 6
岡山県教育委員会	岡山県埋蔵文化財報告 21
倉敷市教育委員会	倉敷市文化財だより 第７号、倉敷市埋蔵文化財報告 第２～３集
広島県教育委員会	広島県埋蔵文化財保護行政資料 2、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第95～96集
東広島市教育委員会	東広島市教育委員会文化財調査報告書 第19集
下関市教育委員会	御堂遺跡
豊北町教育委員会	国指定史跡土井ケ浜遺跡保存修理事業報告書
徳島市教育委員会	矢野遺跡発掘調査概要
高松市教育委員会	横立山東麓１号墳・史跡高松城
福岡県教育委員会	行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第１集、椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 ３～５、今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告、第13集、特別史跡 大野城跡Ⅶ、福岡県文化財調査報告書 第93～94集
福岡市教育委員会	福岡市埋蔵文化財年報 平成元(1989)年度、福岡市埋蔵文化財調査報告書 第237～270集
筑後市教育委員会	筑後市文化財調査報告書 第６集
直方市教育委員会	直方市文化財調査報告書 第12集
豊前市教育委員会	豊前市文化財調査報告 第６～７集
黒木町教育委員会	黒木町文化財調査報告 第１集
古賀町教育委員会	古賀町文化財調査報告書 第10集
津屋崎町教育委員会	津屋崎町文化財調査報告 第７集
前原町教育委員会	前原町文化財調査報告書 第35～36集
吉富町教育委員会	吉富町文化財調査報告書 第３集
新吉富村教育委員会	新吉富村文化財調査報告書 第６集
大平村教育委員会	大平村文化財調査報告書 第７集
唐津市教育委員会	唐津市文化財調査報告書 第37～47集
大野町教育委員会	大野地区遺跡群発掘調査概要 Ⅰ
宮崎市教育委員会	垣下遺跡、蓮ケ池横穴群保存整備事業概報 Ⅴ
えびの市教育委員会	えびの市埋蔵文化財調査報告書 第５・７・９集
指宿市教育委員会	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 9

㈳日本金属学会付属金属博物館	金属博物館紀要 第16号
秋田県立博物館	博物館ニュース No.84、秋田県立博物館研究報告 第16号
埼玉県立さきたま資料館	調査研究報告 第４号、資料館報 No.21・22
埼玉県立歴史資料館	研究紀要 第13号
国立歴史民俗博物館	歴博 第46～47号
千葉県立中央博物館	千葉県立中央博物館研究報告 人文科学－第１巻第３号－
千葉市立加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第18号
船橋市郷土資料館	写真でみる船橋 １、資料館だより 第51～53号
流山市立博物館	流山市立博物館展示解説 第22集
調布市郷土博物館	郷土ウォッチング No.４、調布の文化財 第９号、展示解説シート No.13～18、調布市郷土博物館だよりNo.37、田中屋重蔵伊勢へ行く－道中日記にみる江戸庶民の旅－
大田区立郷土博物館	大田区立郷土博物館だより 第24号、博物館ノート No.49～60、大田区立郷土博物館紀要 創刊号(1990年度)、特別展 ナベ・カマの歴史～出土品で探る日本人の食文化～
出光美術館	出光美術館館報 第74号
茅ケ崎市文化資料館	資料館だより No.74～75、資料館叢書 10
横浜市三殿台考古館	横浜市三殿台考古館館報 No.16
長岡市立科学博物館	長岡市立科学博物館研究報告 第26号
富山市考古資料館	富山市考古資料館報 No.21、富山市考古資料館紀要 第10号
石川県立歴史博物館	石川れきはく 第18～20号、参勤交代、シルクロードと仏教文化、石川県立歴史博物館紀要 第２・４号
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第48～49号
塩尻市立博物館	平出遺跡考古博物館ノート ４
浜松市博物館	浜松市博物館だより 34号、瓦屋西古墳群－Ａ・Ｂ・Ｄ群、瓦屋西Ｉ遺跡
愛知県陶磁資料館	愛知県陶磁資料館研究紀要 ９、企画展 「福井のやきもの」
一宮市博物館	一宮市博物館だより 第11号
斎宮歴史博物館	斎宮歴史博物館だより No.８、国史跡斎宮跡発掘調査概報、企画展 斎宮をめぐる人々－大来皇女と壬申の乱－
大津市歴史博物館	企画展 火の贈り物－国づくりを支えた古代人御技術－
彦根城博物館	彦根城博物館だより 13～14、彦根城博物館研究紀要 第２号
大阪市立博物館	大阪市立博物館蔵品目録、大阪市立博物館研究紀要 第23冊、大阪市立博物館報 No.30
柏原市歴史資料館	柏原市歴史資料館館報 ２
堺市博物館	館報 Ｘ
兵庫県立歴史博物館	わたりやぐら 第19号、歴博ニュース No.34～35、兵庫県立歴史博物館紀要塵界 第３号
神戸市立博物館	博物館だより No.35～36
芦屋市立美術博物館	なりひら 第３号、芦屋の歴史と文化財
播磨町郷土資料館	館報 1990
奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	橿原考古学研究所付属博物館特別展図録 第35冊

鳥取県立博物館	鳥取県立博物館研究報告 第28号、郷土と博物館 71～72号
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 №106～108
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館ニュース 第７号、企画展示図録 中世の民衆とまじない、春の企画展示図録、瀬戸内の中国陶磁、秋の企画展 備後表ー畳の歴史を探るー
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 42
広島県立歴史民俗資料館	歴風ニュース 第１号
岡山県立吉備路郷土館	吉備路郷土館だより №14
九州歴史資料館	大宰府史跡 平成２年度発掘調査概報
北九州市立考古博物館	弥生古鏡を掘るー北九州の国々と文化ー
佐賀県立博物館・佐賀県立美術館	佐賀県立博物館・美術館報 第91号
佐賀県立九州陶磁文化館	肥前地区古窯跡調査報告書 第８集
筑波大学歴史・人類学系	歴史人類 第19号
早稲田大学所沢校地文化財調査室	お伊勢山遺跡の調査 第２部
千葉大学文学部	日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究
東京大学総合研究資料館	東京大学総合研究資料館ニュース 22号
東京大学文学部考古学研究室	東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第９号
東京大学埋蔵文化財調査室	東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 ２～４
國學院大學考古学資料館	考古学資料館紀要 第７輯、考古学資料館要覧 1990
国士館大学文学部考古学研究室	考古学研究室報告乙種 第６・８冊
東洋大学文学部史学科	白山史学 第27号、東洋大学文学部紀要 第44集
日本大学史学会	史叢 第46号
立正大学文学部考古学研究室	考古学研究室彙報 25、吉田格コレクション 考古資料図録
立教大学博物館学研究室	MOUSEION 36
早稲田大学考古学会	古代 第91号
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室	早大埋蔵文化財調査室月報 №72～75
金沢大学資料館	金沢大学資料館だより 第２号
名古屋大学文学部考古学研究室	考古資料ソフテックス写真集 第６集、名古屋大学文学部研究論集 110
学校法人 大手前女子学園	源為朝 外史
学校法人 村上学園	西堤遺跡発掘調査報告書
神戸女子大学史学会	神女大史学 第７号
奈良大学文学部文化財学科	文化財学報 第７～８集、奈良大学紀要 第19号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第５号
山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学埋蔵文化財資料館だより №13、山口大学構内遺跡調査研究年報 ＩＸ
別府大学付属博物館	松山遺跡第２次発掘調査
日本窯業史研究所	小砂焼

大宮市遺跡調査会	大宮市遺跡調査会報告 第31集
山武考古学研究所	小木城下館跡発掘調査報告書、御金蔵跡発掘調査報告書、西大塚遺跡発掘調査報告書、宇田城址発掘調査報告書、関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書、姫宮遺跡第14次発掘調査報告書、花立遺跡、妙義東部遺跡群 Ⅱ
町田市小田急野津田・金井団地内遺跡調査会	町田市金井原遺跡群調査報告書 Ⅰ～Ⅲ
板橋区四葉遺跡調査会	板橋区四葉地区遺跡調査報告書 Ⅲ
文京区真砂遺跡調査会	真砂遺跡第３地点
文京区神田上水遺跡調査会	神田上水
文京区遺跡調査会	真砂遺跡第２地点
小笠原諸島他遺跡分布調査会	小笠原諸島他遺跡分布調査 平成２年度調査概報（２）
都立学校遺跡調査会	川北遺跡、白鷗 １～２、都立竹早高校内埋蔵文化財発掘調査概報、都立第一商業高校内埋蔵文化財発掘調査概報、都立工芸高校内埋蔵文化財発掘調査概報
日本製鋼所遺跡調査会	武蔵国府関連遺跡調査概報 Ⅱ
武蔵国分寺関連遺跡調査会	武蔵国分寺関連遺跡の調査 Ⅱ
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第42号
日本考古学協会	日本考古学年報 42（1989年度版）
国立国会図書館	日本全国書誌 №1809
㈱文藝春秋	驚異への旅 日本古代七つの謎
雄山閣出版株式会社	季刊考古学 第36号
㈱名著出版	歴史手帖 第211～214号
朝日新聞社	古代史発掘 88～90
鎌倉考古学研究所	横小路周辺遺跡発掘調査報告書
玉川文化財研究所	成瀬西遺跡群発掘調査報告書
㈶古代學協會	古代文化 第388～390号、古代學研究所研究報告 第２輯
濱田耕作先生著者集刊行委員会	濱田耕作著者集 第四巻
㈱同朋舎	図説日本の史跡 第２巻
㈱思文閣出版	中世考古美術と社会
関西近世考古学研究会	関西近世考古学研究 1
古代を考える会	古代学評論 第２号
㈶黒川古文化研究所	黒川古文化研究所収蔵品目録 18～19
淡神文化財協会	淡神文化財協会ニュース 第10～15号
妙見山麓遺跡調査会	市原・熊野神社裏遺跡
日本城郭研究センター城郭研究室	城郭関係図書所在一覧
宮内庁正倉院事務所	正倉院年報 第13号
帝塚山考古学研究所	横穴式石室を考える－近畿の横穴式石室とその系譜－、考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状 第１～４回
埋蔵文化財天理教調査団	発掘調査20年、考古学調査研究中間報告 17
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 第35～36号
啓明大學校博物館	文化遺跡發掘調査報告書 Ⅲ

昌原大學校博物館	昌原大學校博物館學術調査報告 第３冊
㈶京都市埋蔵文化財研究所	京都市埋蔵文化財研究所調査報告書 第10冊
京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財調査センター	京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成２年度、平安京跡発掘調査概報 平成２年度、鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成２年度、北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報 平成２年度
㈶向日市埋蔵文化財センター	向日市文化財調査報告書 第31集
京都府教育委員会	円光寺所蔵伏見木活字関係歴史資料調査報告書、京都府の文化財 第９集
丹後町教育委員会	京都府丹後町文化財調査報告 第８集
弥栄町教育委員会	京都府弥栄町文化財調査報告 第７集
野田川町教育委員会	京都府野田川町文化財調査報告 第６・８集
宮津市教育委員会	市史編さんだより 第１号、宮津市文化財調査報告 第22集
綾部市教育委員会	綾部市文化財調査報告 第18集
長岡京市	長岡京市市史編さんだより №４～５、長岡京市史 資料編１
大山崎町教育委員会	大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第８～10集
八幡市教育委員会	八幡市文化財発掘調査概報 第９集
宇治市教育委員会	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第16～17集
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第21集
加茂町	加茂町史編さんだより紫陽花 第11号、加茂町史 第２巻
山城町教育委員会	京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第９集
木津町	木津町史 本文篇
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館だより №88、丹後郷土資料館ニュース 第21号、丹後郷土資料館報 第10号、特別陳列図録28 ふるさとの塩づくり
京都府立総合資料館	総合資料館だより №88、資料館紀要 第19号、京都府資料目録追録 №７
㈶京都府文化財保護基金	文化財報 №73
京都市文化観光局文化財保護課	京都市文化財だより 第15号
京都国立博物館	平成元年度 京都国立博物館年報
亀岡市文化資料館	第11回企画展図録 尊氏と丹波の土豪
京都市歴史資料館	公家・武家・寺家、企画展図録 京都市の文化財新指定の美術工芸品
京都市考古資料館	リーフレット京都 №28～29
向日市文化資料館	特別展「女性の装い」展示解説、向日市古文書調査報告書 第１集
㈶泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第七巻
京都大学埋蔵文化財研究センター	京都大学埋蔵文化財調査報告 Ⅳ
京都大学文学部博物館	先史時代の北白川
花園大学	大宇陀町所在前方後円墳実測調査報告書
同志社大学校地学術調査委員会	同志社高等学校理科館改築に伴う埋蔵文化財の調査
京都ゼミナールハウス	安定期社会における人生の諸相－仕事と余暇－
綾部の文化財を守る会	綾部の文化財 第32号

八木史談会	郷土誌八木 第４号
精華町文化財愛護会	精華町文化財愛護会だより 第８号
精華町の自然と歴史を学ぶ会	波布理曽能 第８号
第２回生涯学習フェスティバル実行委員会	実行委員会報告書 第２回生涯学習フェスティバルのすべて
穴 沢 咏 光	日本の古代遺跡 45
網 田 樹 夫	戦国史研究 第21号
岡 村 秀 典	日本考古学協会1990年度大会発表資料集、第５回シンポジウム 卑弥呼の銅鏡百枚の謎－銅鏡の製作と分布－
小 山 雅 人	古代史の迷路を歩く、追論 騎馬民族説、荒神谷遺跡銅剣発掘調査概報、考古学の窓、日本古代仏教の展開、北陸古代王朝の謎、鉄剣の謎と古代日本、鉄剣文字は語る－115文字が明かす古代史の謎－、古代時の伝言－考古学講義－、朝日シンポジウム 高松塚壁画古墳、宮都と木簡－よみがえる古代史－、斐川町荒神谷出土銅剣358本銅鐸６個銅矛16本の謎に迫る、京都府100年のあゆみ、京都新聞創刊100周年記念シンポジウム 謎の古代京・近江－京滋文化の源流を探る－、ＮＨＫブックス 274、カラーブックス 228・346・413・432
長谷川 行孝	ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告－植物園北遺跡－
畑　美樹徳	伝丹比柴籬宮跡・上田町遺跡発掘調査報告書、造瓦と考古学－木村捷三郎先生頌寿記念論集－
藤 原 秀 樹	伊勢国分寺跡第３次発掘調査概要報告書
水 野 正 好	季刊明日香風 第38～39号

－編集後記－

厳しい残暑もようやくおさまるようになりましたが、情報41号が完成しましたのでお届けします。

本号では、前年度の調査で注目された内里八丁遺跡の水田跡について抄報を掲載しました。また、職員の日頃の研究成果として、小論文と研究ノートを載せることができました。いずれも現地調査で疑問となった点を解明しようとしたもので、意欲的な作となっています。よろしく御味読下さい。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報　第41号

平成３年９月26日

発　行　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の３
TEL（075）933－3877（代）

印　刷　㈱　中　村　太　古　舎

TEL（0775）24－4370